

香川県埋蔵文化財調査年報

昭和 54 年度

1980. 3

香川県教育委員会

讀 岐 國 府 跡 の 食 庫 跡



緒 言

近年の埋蔵文化財調査件数の飛躍的な増大に伴い、全国各地で斯界の耳目を集めめる重要な発掘が相次ぎ、その成果は連日新聞紙上をにぎわしております。

香川県下でも、日本有数の旧石器時代の遺物を包蔵する瀬戸大橋ルートの島々を始めとし、弥生時代の遺跡、古墳、窯跡、古代官衙跡から、中世の山岳寺院、山城に至るまで、多種多様な遺跡の調査が実施され、いにしえの讃岐の姿をしのぶよすがともなる貴重な遺構、遺物が検出されております。

これらの調査に関しては、各調査主体者の手によって、そのつど報告書が刊行されておりますが、香川県教育委員会では、年度ごとに県下の埋蔵文化財に関する調査を集成し、その概略を速やかに報告すべく、昨年度から『香川県埋蔵文化財調査年報』を作成しております。

調査報告の内容につきましては、その性格上多々不備の点があるかと思いますが、本書の刊行によって埋蔵文化財に対する理解と関心が更に高まり、今後の文化財保護に対するご支援が得られれば幸甚と存じます。

最後になりましたが、発掘調査及び本書作成にあたり、ご協力を賜わりました市町教育委員会、地権者、および地域の方々に対し、深く感謝の意を表して緒言といたします。

昭和55年8月31日

香川県教育委員会文化行政課長

笹 川 高 美

目 次

緒 言

昭和54年度における埋蔵文化財の調査	1
花見山遺跡ホウロク岩地区（第一次調査）	3
がんど遺跡	8
北浦遺跡	13
羽佐島遺跡	15
塩浜遺跡（第一次調査）	20
山辺古墳	22
尾ノ背寺跡	27
青ノ山第7号墳	33
青ノ山1号窯跡	38
高屋遺跡	43
讃岐国府跡（第五次調査）	49
西村遺跡（第一次調査）	55
横立山絆塚古墳	60
勝賀城跡（第二次調査）	67
白山3遺跡	73
陰浦第1・2号墳	78
昼寝城跡（第二次調査）	83
文化行政課埋蔵文化財調査担当者名簿	90

昭和54年度における埋蔵文化財の調査

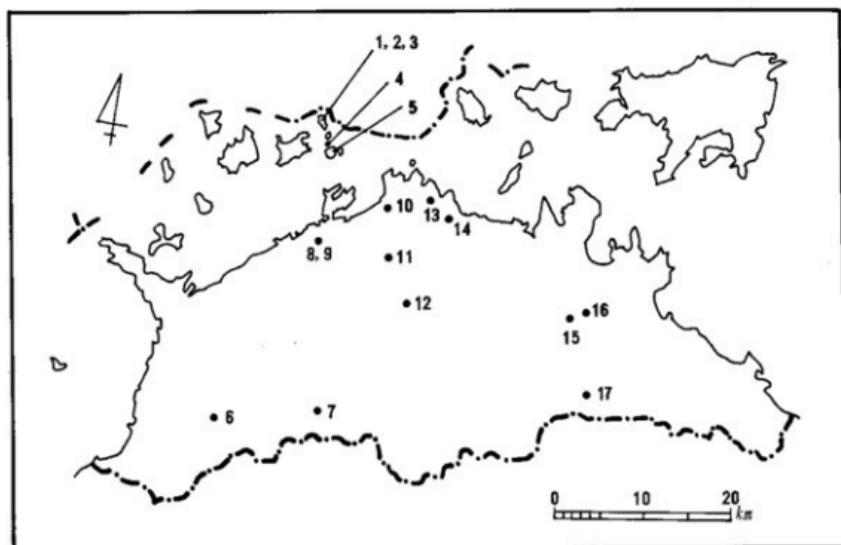
昭和54年度における埋蔵文化財の発掘調査件数は18件であり、昨年度とはほぼ同数である。このうち、大規模土木工事等に伴う事前調査は6件、緊急調査は11件、重要遺跡確認調査は1件を数える。（別表）

昨年度に比して、本州四国連絡橋公団・建設省等との間で締結した発掘調査受託契約は2件であるが、瀬戸大橋架橋工事に伴う海峡部調査は与島・羽佐島・櫛石島でその調査対象面積は約20,000m²、予算1億4,500万円という大規模なものである。また、53年度に予備調査が行われ遺跡が確認された国道82号バイパス建設に伴う西村遺跡は12,000m²を調査するとともに、その東方で試掘を行った結果から遺跡はまだ広がっていることが判明した。この受託調査2件は55年度も継続される予定であるとともに、大洲浜遺跡のように関連事業に伴う緊急調査も予想される。

本年度の緊急調査は昨年度より2件増加した。このうち、国庫補助事業として昨年度より継続調査された仲南町尾ノ背寺跡、高松市勝賀城跡、長尾町昼寝城跡の3件は、いずれも昨年度の成果に基づいた視点からの調査を進め、周辺の関連遺跡の状況も把握したことから、各々その全体像は明らかとなった。学術調査として52年度から継続調査を実施している讃岐国府跡発掘調査事業は予算400万円・調査面積約500m²の小規模なものでありながら、古代宮衙の建物部分を示す直径80cmぐらいの柱穴を10数個確認することができ、從来からの推測が正しかったことが証明された。

市・町教育委員会主体事業は3市4町において8件を数え、昨年度より1町・2件ふえている。このうち小規模な土地造成・土砂採取等に伴うものは4件あるが、いずれも年度なかばまでのものであり、後半は皆無であった。

埋蔵文化財発掘調査は、全国的には10年前の10倍以上にその調査件数は増加し、マスコミに取上げられることもしばしばである。香川県教育委員会は調査体制・資料を拡充しつつ、第2回埋蔵文化財発掘調査報告会や現地説明会を実施してきた。ことに、海峡部調査・西村北遺跡・讃岐国府跡調査は一般人のみならず多くの小・中学生までが訪れ、郷土学習が行われた。このような傾向や最近の市・町の取り組み方からして、埋蔵文化財に対する裾野は次第に広がりつつあると言えよう。



昭和54年度埋蔵文化財調査地位置図

- | | |
|--------------------|---------------------|
| 1. 花見山遺跡(坂出市樺石) | 10. 高屋遺跡(坂出市高屋町) |
| 2. がんど遺跡(〃〃) | 11. 讃岐國府跡(〃府中町) |
| 3. 北浦遺跡(〃〃) | 12. 西村遺跡(綾歌郡綾南町) |
| 4. 羽佐島遺跡(〃与島町) | 13. 横立山経塚古墳(高松市生島町) |
| 5. 塩浜遺跡(〃〃) | 14. 勝賀城跡(〃鬼無町他) |
| 6. 山迈古墳(三豊郡山本町) | 15. 白山3号墳跡(木田郡三木町) |
| 7. 尾ノ背寺跡(仲多度郡仲南町) | 16. 陰浦1・2号墳(大川郡長尾町) |
| 8. 青ノ山第7号墳(丸亀市飯野町) | 17. 昼寝城跡(〃〃) |
| 9. 青ノ山1号窯跡(〃〃) | |

花見山遺跡

ホウロク岩地区
(第一次調査)

所在地 坂出市櫃石

調査期間 昭和54年7月9日～同55年1月9日

調査担当 竹下和男・廣瀬常雄・真鍋昌宏・西村尋文

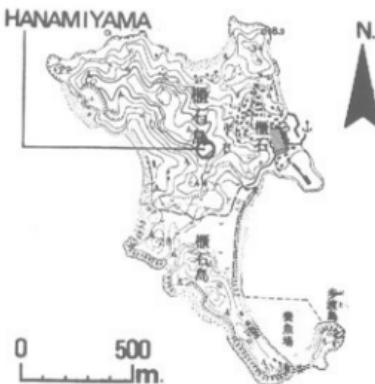
(1) 調査の経過

瀬戸大橋架橋にともなう調査として実施した。かって昭和51年9月より12月にかけて当地域花見山に予備調査を実施し、ナイフ形石器、マイクロ・コアを中心とした旧石器の遺物包含層を確認した。今回の調査は、その成果をふまえ、予備調査を行った地域をふくめた花見山ホウロク石地区山頂、尾根筋の約4500m²を対象地とし、このうち約1600m²を発掘した。

(2) 遺跡の概要

櫃石島は坂出市の北方沖約10kmに位置し、約1km北に本州の岡山県倉敷市下津井がある。周囲約5.4kmの島であり花崗岩の基盤がその島を形成しており、山頂や傾斜面のいたるところに花崗岩の露岩がみられる。島の北東部に平坦地があって人家が集中しており、また中央部の東側に後背湿地がひらけ、現在小規模な畑作が行われている。

花見山は櫃石島のはば中央部にあり、標高約76.5mの山頂を中心として呼称されているようであり、調査地域のホウロク石とは花見山から派生した支脈上の標高約56mに巨石が位置する周辺を言う。かっては一帯が畑に開墾されていたが、現在では一部にミカン・梅などが植えら



第1図 花見山遺跡



第2図 花見山遠景

れている以外、雑草が繁茂している状態である。

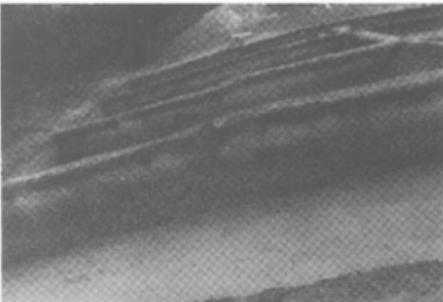
昭和51年の予備調査の結果、サヌカイトを素材とした大量の石器を検出しておらず、その大部分を旧石器時代の遺物としている。さらに、「必ずしも層位的出土状況を示した遺跡とはできない」としながらも各石器の細かい観察、分類によって、本調査地点の石器の変遷を「縦長剣片、翼状剣片、国府型ナイフ（宮田山型ナイフとされていた小型半月形ナイフを含めて）→井島I型ナイフ→A・B類の細石核による細石刃文化」として把握しようとしている。^出

予備調査以前にも若干の遺物が報告されているが、いずれも旧石器時代の遺物であり、それ以後のものはほとんど知られていない。

なお、調査地区的地形は標高56mのホウロク石のある地点を最高所とし、東より西にくだる緩傾斜の尾根である。

(3) 遺物出土状態と土層

調査地区全域に4m方眼で区画設定を行い、通常4m×8mを一単位として発掘を実施した。今回の調査では調査区全域の土層を五層に区分でき、それを基本にして必要に応じて細分・補足を行った。第一層黒褐色土層（表土層）、第二層暗褐色砂質土層、第三層茶褐色砂質土層、第四層黄灰色砂質土層、第五層黄褐色砂質土層（地山）となる。いずれも櫛石島



第3図 9ig 東 壁

を形成する花崗岩のバイ乱土をベースとしており、各時期における堆積土、あるいは開墾などのために腐植土が混入してそれぞれが形成されたと考えられる。

調査地域内の土層堆積状況を大きくみるならば、舌状にのびた尾根のはば中央で東西両部にわかれる。西部つまり高台の付近では第一層より第五層までが堆積するが、東部傾斜地では第三層が欠け、また第四層が稀薄になって第五層（地山）の直上に第一・二層が堆積する状況が多く見られる。調査区西部にみられる第三層茶褐色砂質土層は腐植土を多量に含むことによって形成されたと思われる安定した土層である。

旧石器時代の遺物は第一層から第四層までのいずれにも見られるが、第四層に包含されるものは極めて微量であり、ほぼ第三層（さらに四層に細分）の上層までにふくまれている。また、その状態は良好とは言い難くナイフ形石器とマイクロ・コアさらに、近・現代の染め付けの類までが同一土層に包含されており、平面的分布も雑然とした状況で全面に広がっている。

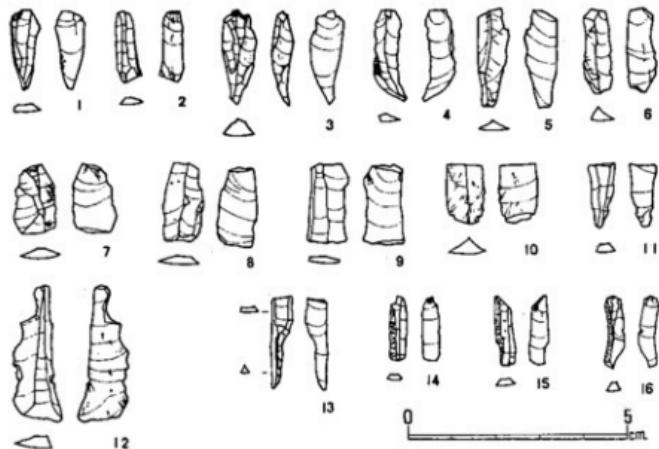
明らかに時間が判明する遺物はほとんどないが、第二層まで「寛永通宝」が入っている。9igと呼称したグリッドの第三層の中層よりピットを2つ検出した。そのうちの1つより土師器碗が出土している。このことより考えれば第三層の中層は古代末の生活面であった可能性はある

が、第一・二・三上層に各時期の遺物が混在する状況などをみれば旧石器時代の文化層を含めて各時期の土層はすでに大きく攪乱されたとすべきであろう。（廣瀬）

(4) 遺物について

○細石刃

総点数は、46点を数える。細石核の出土数に比べ少ない、石材は2点の黒曜石、2点のサヌカイトをのぞき全てハリ質安山岩である。細石刃の明確な部位は、頭部15点、中間部11点、先端部6点であり、完全なものは18点を数える。幅は4~8mmの間にほとんど納まる。断面は三角形あるいは台形を呈する。細石刃打点のネガティブは打面調整痕は、7・16において認められるのみで、他は全て平坦打面を呈する。全ての細石刃には複数の槽状剥離の切り合いが背面に認められるが、5・6のように、背面に側面調整のネガティブな剥離面を残すものや、礫面を残す、4・14・15の細石刃も存在する。背面にネガティブな側面調整剥離及び礫面を残す細石刃は、細石核の側面を切り込んだ細石刃と考えられるが、16のように、ネガティブな調整痕と礫面を共有するような細石刃は、細石刃剥離工程の極く初期の段階のブレイドと考えられる。



第4図 細石刃

○細石核

当調査地区より出土した細石核は、40点を数える。石材で大別すれば、サヌカイト、ハリ質安山岩製の細石核に分けることが出来る。サヌカイト製の細石核は3点のみであり、ほかは全てハリ質安山岩製の細石核である。ハリ質安山岩製の細石核を分類すると、大きくA、B、Cの3類に分類することが出来る。

A類：母岩より剥離された剥片を素材として、その剥離面を側面として細石核を形成する。

B類：球体に近い、荒削された“両面加工品”を作成し、それを分割し、その剥離面を打面として舟底状の形態を呈する細石核を形成する。（第5図-5）

C類：小円礫を2分割、あるいは小さな剥離を施し、その剥離面を、打面あるいは剥片剥離作業面に用い細石刃を剥出する。側面、背面、下縁の器面調整はほとんどおこなわず素材の表皮を残す場合が多い。そのため形態は素材の形状に規制される。（第5図-6）

A類は、石核の形状、あるいは剥片剥離作業面の面数等によりさらに4類に細分される。以下列挙して説明する。

AⅠ：剥片剥離作業面が2面存在し、側面の調整は、素材の剥離面であるポジティブな剥離面を片側面に残し、対する側面にはネガティブな剥離面：あるいは原石の素皮を残す。形態は剥片剥離作業の進行により、半円錐形より円錐形へと変化する。（第5図-1）

AⅡ：片側面を素材からの剥離面であるポジティブな剥離面で形成し、対する側面には素材の表皮を残す。形態は半舟底状を呈する。（第5図-2）

AⅢ：両側面は、ポジティブな剥離面と、打面あるいは下縁部等からの調整剥離を施された側面とで形成される。形態は舟底状を呈する。（第5図-3）

AⅣ：両側面は、ポジティブな剥離面、ネガティブな剥離面の各1面で形成され、背面には素材の表皮を残すもの、折断されたもの、ネガティブな剥離等により形成される。形態は角柱状を呈する。（第5図-4）

当調査地区からはA類の出土が最も多く、B類、C類の出土数は、わずか6点にしかすぎない。そのため当調査地区では、A類が最もボビュラーな細石核であると言えよう。（西村）



第5図 細石核

○土師器碗

第三層で検出したピット中より出土した。口径15cm、器高4.8cm、高台径7.5cm、同高0.6cmである。磨耗が著しいため細部の調整は判断できないが、ゆるやかに弓曲しながら立ち上り、口縁端部は丸くおさめており、全体として薄く仕上げている。碗内面は全面にわたり黒色を呈しているが、外面にはおよんでもない。高台は貼りつけており、ほぼ直角に立ち上る。高台端部はやや内傾するが平坦につくられている。（廣瀬）

(5) おわりにかえて

51年度の予備調査の結果、多量の旧石器の散布を確認している地域であり、良好な遺物包含状態を期待して実施した調査であった。

しかし本調査の結果でみると、旧石器の濃密な分布はホウロク石の位置する尾根最高所の一部分にのみ限定され、またその包含状態は土層序、遺物よりみれば開墾・攪乱をうけており極めて不良なものとせざるを得ない。

花崗岩バイ乱土をベースとし、また生活に不適性な高所が他の個所に比較して多量の遺物を包含している状況は他の島しょう部の調査結果とはほぼ同様であった。

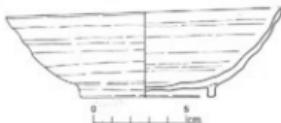
確認した遺構は第三層より検出したピット2のみであり、ピット内からほぼ完形の土師器碗を検出している。比較する材料がない欠点はあるが、器形その他より考えればいわゆる瓦器の出現以前の土器としていいようであり、大きくとらえれば第三層中層を古代末のものと考えて差し障りないと思われる。

旧石器時代の遺物はサヌカイトを素材としたものを中心多く検出している。しかしながら、良好な土層を検出できなかったため、予備調査の結果によって提示された時期的な変遷をたどることは後日の問題とせざるを得ないが、その前提作業として各石器をその型態・調整法によって分類・区分を行なっている。（廣瀬）

注1. 「種石島第Ⅱ調査区」(瀬戸大橋架橋に伴う埋蔵文化財予備調査報告)(松本敏三(1977.8))

注2. 「日本列島に於ける細石刃インダストリー」(『物質文化』16 小林達雄)

なお、同種の「両面加工品」は羽佐島遺跡よりも出土している。



第6図 土師器碗



第7図 作業風景

がんどう遺跡

所在 地 坂出市櫃石字北浦通り

調査期間 昭和54年9月3日～同55年2月8日

調査担当者 大砂古直生、大山真光、町川義晃

(1) 調査に至る経過

本州・四国連絡橋坂出-児島ルートの、香川県側最初の地点である櫃石島は、旧石器時代から古墳時代にかけての遺跡があることは、よく知られていた。この為工事に先立ち昭和51年7月より予備調査が行なわれた。

今回の調査は、予備調査においてしめされた、凹地の旧状復元・平坦地において建造物跡の存在・五輪塔群の確認を目的として行なわれた。

(2) 遺跡の立地

がんどう遺跡は、櫃石島北部にある東西に延びる細長い凹地部と、凹地奥部北側の「石の塔」と呼ばれる平坦地からなる。凹地は、海岸近くまで延び、浜堤状に高まる部分では師楽式土器の破片を探集することができる。また凹地には、御座船が入りしていたとの伝承がある。平坦部は、花見山より続く尾根の先端部であり、標高17～18mの地点である。この周辺には仏教関係の古地名が残っている、遺跡名である「がんどう」は、伽藍堂からの転訛と思われる、「しやかのもと」「さいのかわら」と呼ばれる地点もあり、平坦部を下った北側の海岸は、「堂の浦」と呼ばれている。これらの古地名・平坦地状況から考えると、小規模な伽藍堂がいとなまれていたのではないかと考えられる。



ガンド遺跡位置図

1:25000

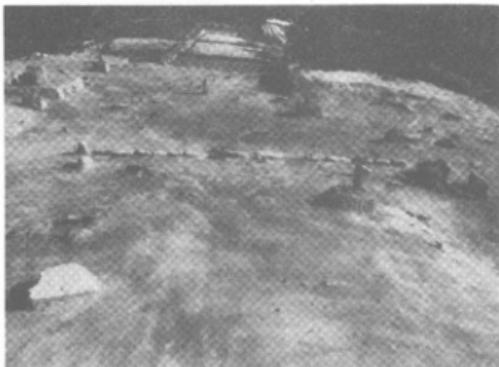
(3) 調査の概要

凹地は過去において水田として利用されていた為か、現在湿地状態となっている。調査は凹地奥部より行なった。堀り進むにつれて湧水が激しく、水との戦いを呈してきた。土層は、耕作土が約20cmあり、それ以下は、砂層・粘質層であった。地表下約15mの地点において、淡灰色砂質土層が認められた。この層は、酸欠状態において出現する土層であり、形成期において、常時水中にあったと思われる。土層は、西から東へ傾斜を持ち、調査区全域において見ることができ、調査区外まで延びていると思われる。この層より深い地点は、湧水・調査区壁の崩壊が激しいので調査を中止した。出土遺物は、流れ込みによる遺物と思われるが、すべて小さな破片であり、その本来の形態を推し量ることができる物はなかった。

平坦部は調査前には、調査区中央部に格狭間を持つ石塔基層、南西隅に崩壊散乱している五輪塔が見られた。調査にかかると、調査区中央部において南北に約6m続く石列を検出した。石列は、西側で右面をあわせており、これより東側に建造物があったと思われるが、それらしい遺構は見ることができなかった。調査区西において、地山を南北に走っている溝が検出された。溝の性格は、はっきりしないが亀山焼甕・石仏が出土した。石仏は肩より上部がないが、右手に錫杖・左手に宝珠を持つ座像であり、地蔵菩薩であろうと思われる。溝より東側の尾根から平坦部への変換点は、地山を切断し約50cmの段を造っている。この地点の平坦面において、押し潰された土師質小皿が多数出土した。南斜面部、斜面上部は、多数の石が散乱していた。斜面部においては、五輪塔を検出することができた。五輪塔は、空・風・火・水・地輪と各輪が検出されたが、空・風・火輪で出土数の大半をしめ、水・



平坦地調査区全景



調査区中央部石列

地輪は他に転用されたのか、非常に少数である。斜面上部においては、「し字」の石列が見られると共に、備前焼の藏骨器が検出された。藏骨器より男性の焼骨を見ることが出来た。石列は墓域を表わすものと考えられ、藏骨器は南北朝後期の物であろうと思われる。斜面部に散乱している石を取り除くと、中世墓であろうと思われる土括が2ヶ所で検出された。1つの土括は、備前焼の甕を棺にしたらしく、掘り方に立てかかった状態で検出された。備前焼片は、平坦部西側全域において、散乱しており、これらも藏骨器として使用されたと思われる。調査区西隅においては、近世墓らしい土括が3ヶ所検出された。

(4) おわりに

今回の調査目的である、凹地部の旧状復元については、すべてを解明することはできなかつたが、平坦部においては目的を達することができた。伽藍堂の位置は、はっきりしなかつたが、中世から近世にかけての遺構・遺物の検出ができる、遺物から見ると、当然ではあるが山陽地方の影響を強く受けていることが確認され、五輪塔は各輪を2~4型式に分類することができ、基礎的な資料をえることができた。がんどう遺跡においては中世~近世にかけて、櫃石島においてなんらかの、宗教的な位置をしめていたのではないかと思われる。

調査は、2月9日から8月5日まで中断したが、以後調査を再開し調査区西方の調査を行ない、4月22日で埋戻を含め調査は終了した。

調査の経過・遺構・遺物等についての詳しいことは、『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査概報(Ⅱ)』を参照されたい。(大砂古)



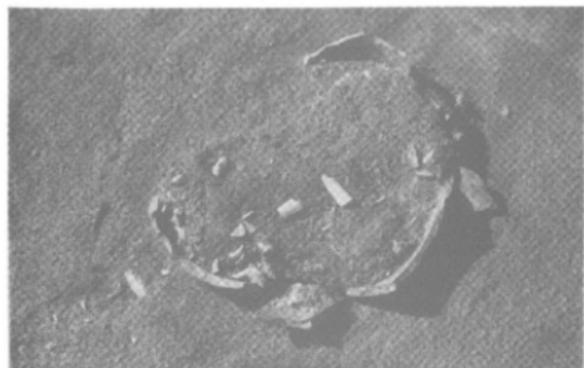
出土石仏



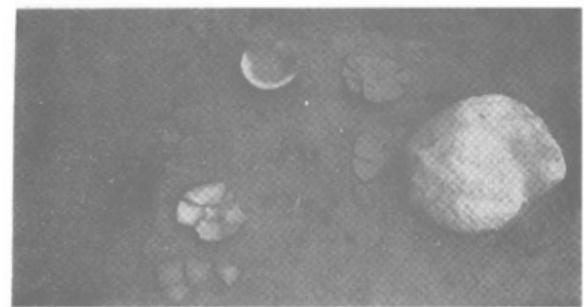
五輪塔出土状況



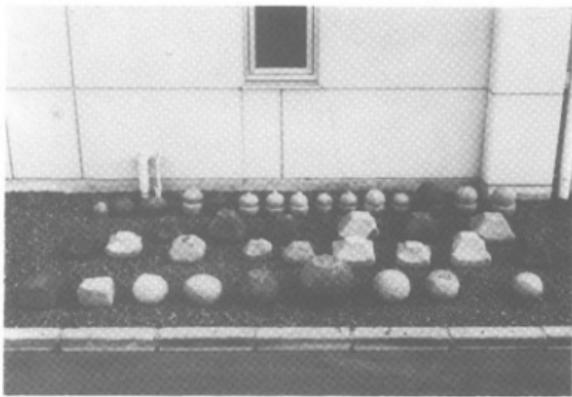
L字形石組み



遺骨器出土状態



土師質小皿出土状態



出土五輪



調査風景

北浦遺跡

所在地 坂出市櫛石大字北浦通り

調査期間 昭和54年11月13日～同年12月24日

調査担当者 大山真充、大砂古直生、町川義晃

(1) 調査の経過

瀬戸大橋架橋に伴う事前調査として予備調査が昭和51年に行なわれ、サヌカイト・チャート細片、陶磁器等の出土が報告されている。その成果を踏まえて、昭和54年1月から調査が実施され予備調査で検出されなかった遺物等が確認されある程度の成果を収めることができた。

(2) 遺跡の概要

櫛石島の北東部に位置する北浦遺跡は、標高約20m前後の台地状を呈する低丘陵であり、北側には約1.75kmの所に下津井港・鷲羽山があり岡山県と近接した立地を示す。

調査は、丘陵の(立木などの制約があったが)ほぼ西半部分、調査面積約750m²を発掘した。調査区の設定に当たっては、西側のがんど遺跡の調査に際して設定されたポイント名称を延長して使用した。

予備調査の結果からも推測される様に、サヌカイト片を含め中・近世から現代に至るまでの遺物が混在して出土する状態で



第1図 周辺の遺跡と位置 1:25,000

1. 北浦遺跡
2. トビノス遺跡
3. がんど遺跡
4. 製塙遺跡
5. 宮崎古墳
6. 馬石・ゼニガミ石遺跡
7. すくも塚
8. 花見山地区ホウロク岩遺跡
9. 大浦及び大浦浜遺跡
10. たてわ古墳1・2・3号
11. 櫛岩遺跡
12. 歩渡島遺跡
13. 岩黒島遺跡

あった。土層序は基本的に、①表土・②耕作土・③地山（花崗岩風化）であるが、②、③層間にバイラン土を含む3つの層が確認できる。そしてその堆積状態は調査区中央部は浅く、斜面に向かう程厚く堆積している状況から判断される様に丘陵頂部に平坦面を有する台地状の地形は、開墾時に削平され斜面方向に引き寄せられた状況を意味するものであろう。

(4) 出土遺物 (図2, 1~13)

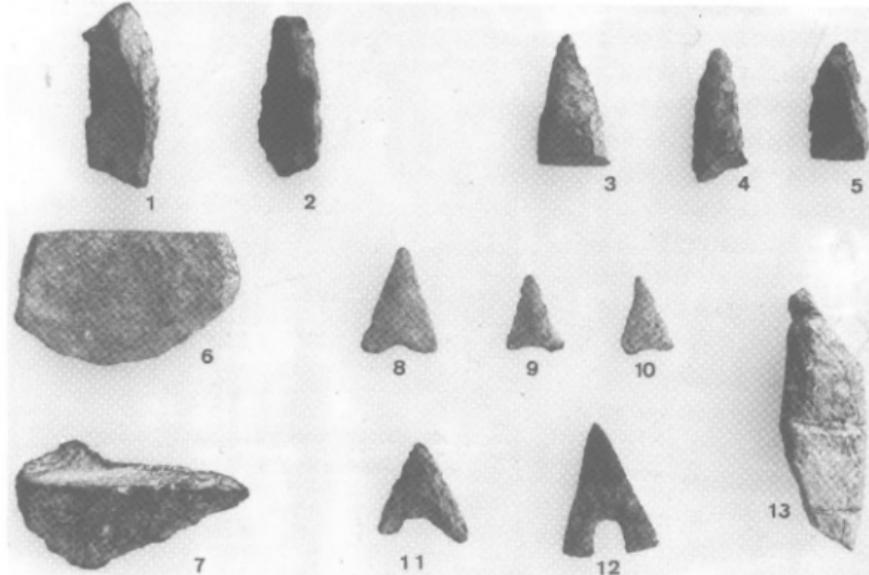
1, 2 - ナイフ形石器 4 - ナイフ形石器の基部 3, 5 - ナイフ形石器で先端部まで調整が及ぶ。6 - 削器、7 - 側縁部より先端にかけて調整が行なわれており、先端と側縁を意識している。8~12 - 石鏃、13 - 不明滑石製品

(5) 結語

土層状況より、判断可能な様に地山直上付近まで、既に攪乱が及んでおり出土遺物も巾があり、散在的にしか検出されなかった。

しかし、出土石器に見られる特徴と種類から考えると、同島の花見山地地区ホウロク岩・与島西方・羽佐島・岩黒島の出土状況に対して、量こそ少ないがその傾向には近似性が認められる。

尚、予備調査の段階では「北浦通り」と、記載していたが本調査の結果出土遺物等の状況から判断して『北浦遺跡』とすることを名記する。詳細は『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査概報(Ⅱ)』を参照されたし。(町川)



第2図 出土遺物

羽佐島遺跡

所在 地 板出市与島町羽佐島

調査期間 昭和54年4月9日～昭和54年11月16日

調査担当者 竹下和男・渡部明夫・藤好史郎・白本 清

中西 昇・町川義晃・西村尋文

(1) 調査の経過

昭和52年9月から10月にかけて実施した予備調査の成果に基づき、昭和58年7月17日から実施していた羽佐島遺跡の本調査は、昭和54年度も継続して実施した。調査面積は、4,254m²に及び、25万点を越える膨大な量の遺物が出土した遺跡の調査も、昭和54年11月で終了した。（藤好）

(2) 遺跡の概要

羽佐島は、備讃瀬戸に浮かぶ小島で、東経133°49'・北緯34°28'30"付近に位置する。そして、200mほど南に与島が近接し、約800m北には岩黒島、約1.5km西には本島があって、これらの島々とともに塩飽諸島の一部を形成している。

羽佐島は南北約500m、東西約150mたらずの細長い無人島で、北側に標高82m、南側に標高22mの低い頂部をもつ。海岸にはみるべき平地ではなく、花崗岩からなる小丘状の小島をなしている。島内の植生は、南側の頂部周辺が松林となるほかは、ササ・ツタ・灌木からなる。鞍部から北側頂部にかけては戦後の一時期畑がつくられていたためか、灌木もほとんど含まず、ササやツタが茂っていた。

旧石器時代の遺物は、南北の頂部や中央の鞍部、さらに斜面上部から広範に出土した。海岸部でも摩滅したサヌカイト片が採集され、その中からナイフ形石器や有舌尖頭器などが確認できた。（渡部）

(3) 土層序と遺物出土状態

羽佐島遺跡における土層序は、第1層：表土層、第2層：淡褐色土層、第3層：灰褐色土層、



第1図 羽佐島の位置

第4層：黄褐色土層、第5層：地山、第6層：黄褐色土層、第7層：暗褐色土層、第8層：暗褐色土層に大別される。第4層と第6層は、基本的には同一の層であるが、第4層には暗褐色のブロック状斑紋が存在し、第6層では存在しない。第7層と第8層は、共に脊植を多量に含む土層であり、根の進入による崩壊の程度により2層に分けた。

本遺跡南部に位置する発掘区の層序は、上面より第1層、第2層、第3層、第6層、第4層、第5層からなり、第6層は主に斜面部において第4層より分層できる。この層序は、与島西方遺跡、櫻石花見山遺跡など、花崗岩バイラン土をベースとした地域で一般に見られるものである。

北部に位置する発掘区の層序は、上面より第1層、第7層、第8層、第3層、第4層、第5層からなり、第7層・第8層は、近世初頭より昭和にかけて、畑作地として利用していたため、本来存在していた第2、第3層が、脊植の多い土壤に転化したものと考えられる。

本遺跡の総発掘面積は $4,254\text{ m}^2$ 、総遺物出土点数は、25万点を越える。そのうち旧石器時代の遺物が大半を占める。全発掘区の遺物分布は、北部のグリッドでより濃密な出土を示した。



第2図 A36-1～A36-5 第4層遺物出土状態

本遺跡の一般的な出土状態は、第1層から第3層までに大半の遺物が出土し、土器片の混在も著しい。第4層に入ると出土遺物は極端に減少し、土器片もほとんど含まれない傾向を示す。その中で、第4層中に濃密な遺物の出土を示す場所が4箇所確認できた。第1箇所は、島南部

尾根筋に位置し、若干の土器片を含みながらも、旧石器時代遺物が濃密に出土した。第2箇所は、島中央鞍部に位置し、フレイク、チップのみが集中して出土した。第3箇所は、島北部尾根筋から西斜面にかけて他よりも広くかつ濃密な出土を示した場所で、旧石器時代遺物が大半を占めているが、若干の土器片も含む。第4箇所は、島南部東斜面に位置し、炭化物・土器・サヌカイト片・石器が出土した。炭化物が不整楕円形の掘り込み中に濃密な分布を示しており、炉跡の可能性もある。

これらの集中箇所は、どのような過程を通して形成されたものであろうか、現段階では明確な答を出すことが出来ず、今後の課題としたい。（白木）

(4) 遺構について

C10-1 南東部分の第4層下部において、ケシ粒大の炭化物の著しい集中をみた。土層を観察しながら掘り下げたところ、径約17mのいびつな円形の落ち込みを検出した。サヌカイト製スクレイパー5点のほか、石鎚・叩き石破片・時期不明土器片数点などが出土した。

本遺構は、炭化物の立体的集中傾向からみて、当初炉址と想定したが、焼土は全く検出されなかった。また、埋土は、ブロック状の硬質の土によって形成されており、一般的なピット内の堆積状況とは異なっている。よって本遺構をピットとは認定し難いが、周辺では殆んど無遺物層となっているにもかかわらず、この地点のみ地山直上まで炭化物の集中がみられ、石器が出土する点から、何らかの遺構であると考えられる。その性格、形成時期の検討については今後の課題とし、現在のところは、時期不明の炭化物集中遺構とするに留めておきたい。（中西）

(5) 主たる遺物

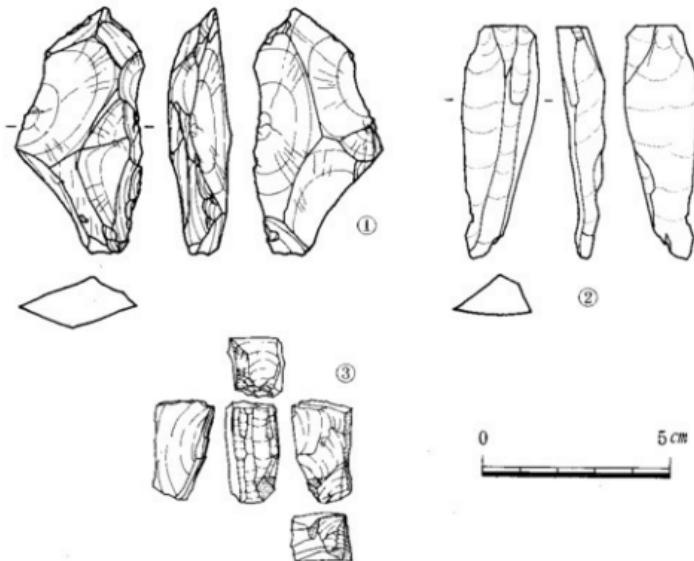
今年度の出土遺物もほとんどが旧石器時代のものであるが、押型文土器と縦軸土器が新たに確認され注目された。

旧石器時代の遺物は本年度もきわめて大量に出土したものの、様相は昨年度とほぼ同じである。今年度の調査で出土したものとしては、ナイフ形石器・削器・石錐・彫器・楔状石器・舟底形石器・打面調整剝片・尖頭器・翼状剝片・横長剝片・翼状剝片石核・横長剝片石核・縦長剝片・縦長剝片石核・細石刃・細石刃核・叩き石・石屑などがある。

横長の剝片を用いたナイフ形石器とその石核は本年度も多數の出土をみた。石核は、翼状剝片石核のほかに、翼状剝片と横長剝片を同時にとったもの（第4図1）や、横長剝片石核があり、それぞれがさらに細分できるので、ナイフ形石器との細かな対応も可能となるかもしれない



第3図 炭化物集中遺構



第4図 羽佐島遺跡出土石器

い。（渡部）

縦長剣片は、その多くが現在では白色に風化した様相を呈すサヌカイトを素材としている。以前風化度が進んでいたことから、この縦長剣片を古い時期の所産であるという考えが一部ではあった。しかし、遺跡の調査を通じ同じ花崗岩バイラン士中から出土した石器においても、白色に風化したものを多く確認できる。白色に風化したサヌカイトを素材とした縦長剣片における風化度の高さは、必ずしも時期的に他より古いくことに起因するものではなく、サヌカイト中における石質の差により、風化度が高くなったものであろう。また、縦長剣片、同石核は側面においてリングがあり目立たない平坦な面からなっている。このことは石材の「目」をうまく利用していることによるのであろう。この特徴は白色に風化したサヌカイトを素材としているものに顕著である。

細石器には、本遺跡においては、黒曜石・サヌカイト・ハリ質安山岩が使用されている。コア・ブレイド・プランク・フレイク等が出土している。ハリ質安山岩製の細石器が量的には最も多い。ハリ質安山岩は他の時期に属する石器においてはその素材として使用されていず、細石器の時期に属する遺物に限定して使用されている。（藤好）

今年度の調査で、縄文時代早期の押型文土器片が10点余り出土した。楕円形文と連続山形文とがある。また、楕円形押型文土器に似た胎土、焼成の無文土器片も出土した。

また、同時期の石器と考えられるものとして、全長19cmの石槍が出土した。

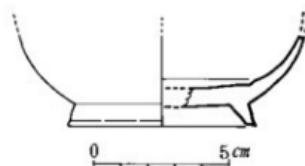
縄文時代の石器としては、石匙・削器・石鎌などのほか、昨年度与島西方遺跡で出土した^(注1)いわゆる矢柄研磨器とされている石製品も出土している。（中西）

縄文時代以後の遺物としては、弥生土器・石鎌・土師器・須恵器・綠釉土器・瓦器・輸入磁器・中世陶器・土鍤や、近・現代の陶器などが出土した。量的には古代末～中世のものが多い。

ところで、羽佐島遺跡から、香川県では例の少ない綠釉土器が出土したことは注目される。羽佐島ではほかに歴史時代の高台付須恵器壙もいくつか出土し、また、与島西方遺跡では神功開宝が出土しているが^(注2)、両者とも当時の生活遺跡とは考えられないで、こうした遺物は航海にともなう小規模な祭祀を示す可能性が強いものと思われる。（渡部）

（注）1. 香川県教育委員会『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査報告』(I)、『与島西方遺跡』
1979

2. 同上



第5図 羽佐島遺跡出土綠釉土器

なお、本遺跡の昭和54年度の概要については、『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査報告』(II)、『羽佐島遺跡』(II)が刊行される予定であるので、それを参照されたい。

塩浜遺跡 (第一次調査)

所在地 坂出市与島町字塩浜

調査期間 昭和54年6月4日～7月28日

調査担当者 大山真充・大砂古直生・町川義晃

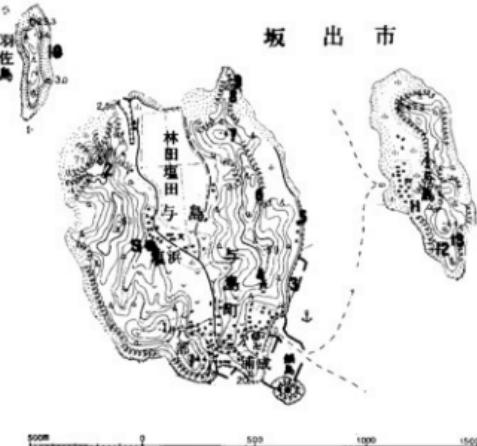
(1) 遺跡の概要

備讃瀬戸に浮かぶ与島は、南北に伸びる2つの低丘陵間に、侵食作用などで形成された小規模な平坦地が存在する。そして、北側に塩田跡があることから推測すれば、旧地形の状態は相当、海岸線が入り込んでいたことが判断できる。今回、発掘対象とする塩浜遺跡は、西側の丘陵部ほぼ中央、東側裾部に位置する。遺跡の立地は、かつて入江の凹地状を呈していたであろう。本調査は、第1次の調査であり、面積252m²を発掘した。翌年1月7日から、すぐ東側で第2次の発掘が行なわれた。

(2) 土層について

約15m掘り下げた結果、土層は11層確認でき、全層にわたって遺物が検出された。その中で、基本的に土質・含有物等で4区分可能である。

①耕作土(現代)、②黄褐色土層(2～4層、現代～中世)、③褐色砂質土層(5～7層、中世～古墳時代)、④灰色砂(質土)層(8～11層、弥生～縄文時代)そして、④が消えると、青色の強い粗砂粒層が現われる。当初、この層が旧海岸線と考えていたが科学分析の結果、堆積過程でのある一時面であることが判明した。また、当層の上面で「樟」と考えられる木が、主根だけを四方向に張った状態で残存していた。現存する1.8m前後の枝根と直径約80cm程の幹から推測すると、ある程度の大きさが推定される。



第1図 周辺の遺跡と位置

- S 塩浜遺跡C地区 1. シノダ遺跡 2. 西方遺跡
- 3. タテバ遺跡 4. 山の神 5. 大州浜遺跡
- 6. ミドロ遺跡 7. 東方遺跡 8. 長崎鼻石組遺構
- 9. 長崎鼻古墳 10. 羽佐島遺跡 11. 御山遺跡
- 12. 御宮様遺跡 13. 小与島縄文式遺跡

(3) 出土遺物

遺物の出土は上層状況にある程度、反映されているが明確には把握できない。その中で、灰色砂（質土）層から検出された縄文時代の所産であると考えられる出土遺物を列挙する。

1) 土器口縁部—深鉢形と浅鉢状の型態を示す。深鉢形土器の器面は、条痕と思われる面に鋭い縱横の連結する沈線が構成されている。浅鉢は内外面共によく磨かれており、屈曲部に沈線後の刺突がある。

2) 底部—平底・上げ底状、上げ底の中央に凹みを有する。器形、時期差であるか明確でない。

3) 削器一材質は全てサスカイトであり、何種類かの分類が可能である。主要剝離面からの剝離・交互の剝離・刃部が直線的・或いは彎曲するものなどが認められる。

4) 分銅形石器一縦、横約5cmを計り、 $\frac{1}{3}$ 上にくびれ部が位置する。刃部一端に階段上剝離が見られる。

5) 石皿一砂岩質である。上下面に若干、異なった緩い凹みを有し半分欠損している。

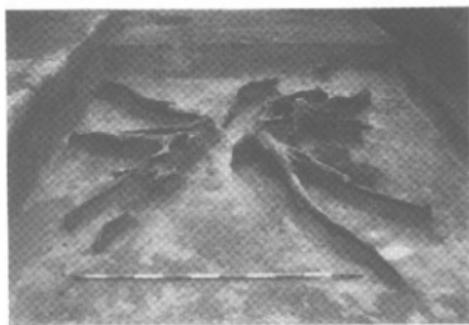
6) 石錐一扁平な楕円錐を素材とし、両端部を打ち欠く。重さは30gである。

(4) 結び

土層・出土状態より判断すれば、何らかの形での生活跡とは考えられない。所謂、包含層である。しかし、灰色砂（質土）層の範囲から検出される遺物は、縄文時代後期以後の時期をあてはめることが可能である。このことから周辺及び内陸部に、当出土遺物と併行期の何らかの状態での生活跡が存在することが考えられる。そして、それらと関連して重要なことは、当時の植生及び海岸線の動向であろう。



縄文土器



自然木（棹）出土状態

尚、昭和52年度、刊行の報告書で「ノダ」と記載されていたが呼称地は当地域より南方に位置する為、本調査からより適切な地名を用い、「塩浜遺跡」と改称する。（町川）

山辺古墳

所在地 三豊郡山本町大字辻字山本 1896 番地

調査期間 昭和 54 年 5 月 1 日～同年 5 月 10 日

調査担当 寒川知治

(1) 調査の経過

山本町は、農業基盤整備のため南岡圃場整備事業を実施していたが、昭和 54 年 4 月 24 日に至り、整備地域東部にあたる山辺地区で土中より古墳の石室の一部が露呈した。

そこで山本町教育委員会は、香川県教育委員会の協力を得て緊急発掘調査を実施する運びとなった。調査面積は約 200 m²である。

(2) 遺跡の概要

本墳は、南の讃岐山脈より北方に延びる丘陵の西側斜面、標高 48 m の地点に位置する。

周辺には、町役場を取り囲む山麓や丘陵上に弥生遺跡が点在する。中でも辻巻は、本墳の立地する丘陵の西側に延びる南岡丘陵上の高額遺跡で、南北 400 m、東西 100 m に及ぶ地域から、夥しい量の弥生式土器や石器類を出土している。高額遺跡より眼下に広がる三豊平野に目を移すと、北西 1 km の辻西遺跡から中広形銅矛が、4 km 離れた古川遺跡から流水文網繩が出土しており注目される。

古墳時代になると、町役場より北東の知行

寺山西麓一帯と、南方の丘陵地帯の辻地区を二大中心地として古墳が築造された。昭和 25 年の調査では、町内に 102 基もの古墳が確認されている。しかし今回現地踏査した限りでは、開墾などによって相当数の古墳が消滅したり、わずかに痕跡を残すだけになっていた。

なお本墳より西方 8.5 km にある母神山（観音寺市）には、大型円墳の鏹子塚古墳や前方後円墳のひさご塚古墳を含め総数 50 基以上にのぼる古墳が集中し、有名な母神山古墳群を形成する。



1. 大野北側古墳群
2. 知行寺山古墳群
3. 水源池古墳群
4. 裏山古墳群
5. 宗連寺古墳群
6. 山王山古墳
7. 高良神社古墳
8. 山辺古墳
9. おどり池古墳群
10. 吹上古墳群
11. 高齢 1 号窓跡
12. 高齢遺跡(弥生遺物散布地)
13. 白谷窓跡
14. 松尾寺窓跡
15. 墓像社古墳群
16. 五十鈴神社古墳
17. 藤田神社古墳
18. 辻西遺跡(銅矛出土地)
19. 青塚古墳

第 1 図 周辺の遺跡

(3) 遺構について

〔墳丘〕

調査に赴いた時、古墳の周囲は既に石室床面近くまで削平されており、封土は殆ど残っていないかった。トレンチ調査により、石室主軸より東7mの地点で溝状の遺構を検出したが、走行方向などより周溝ではないとの所見を得た。

現状では、墳丘は石室規模より径10m前後の円墳であったただろうと推定するのみである。

〔石室〕

本墳の内部主体は主軸線をN10°Wにとり、尾根筋に平行してほぼ南に開口する横穴式石室である。遺存していた石組みは、奥壁一石、東壁四石、西壁三石で、用材として和泉砂岩が使用されている。

玄室高は、床面から鏡石(奥壁)上端部までの高さより100cm以上である。玄室幅は、123～152cmを測り、奥壁より玄門部にかけて広がっている。玄室長は、玄門石と見なされる巨石が石室内より出ており、東壁第5石の位置に抜き跡もあることから、260cm程と考えられる。

残念なことに、玄門西側部分や羨道部は削り去られており、これ以上の平面プランはわからない。

〔床面〕

床面には、この地区に通例といわれる精選された川砂のかわりに、河原石が二重に敷かれていた。上面は、東側8分の2程に握拳人の礫が敷設される。この面は棺床の可能性がある。事実、この礫中より今だ太古の輝きを失っていない銀環が一対出土した。

下面には、径20～50cm、厚さ8cm程の扁平な石が全面に敷かれる。上面に小形の、下面に大形の石を敷くことは、防湿や排水の便を考えてのものであろう。



第2図 山辺古墳遠景



第3図 上面除去後の床面

(4) 遺物について

玄室内中央部から奥壁にかけて、須恵器の杯蓋7点、杯身1点、銀環一对の外、須恵器と土師器の細片が出土した。

杯蓋はすべてつまみを有し、下方にのびるかえりを持つ点では共通しているが、大略2群に分けられる。

A類〔第5図(1)～(5)〕器径10cm強、つまみは擬宝珠形、扁平形など微妙に変化する。器高は1.5～2.5cmである。外面は上部2分の1程に回転ヘラ削り調整がみられ、内面には一定方向のナデ調整がみられる。焼成は良好であるが、一部不良のものもある。

B類〔第5図(6)(7)〕器径15cm以上。つまみは比較的高く、中央部は凹んでいる。器高は8cm強。外面に自然釉が全面にかかる。かえりは短くひねり出したもので、A類程は内向しない。焼成は非常に堅緻である。

杯身〔第5図(8)〕はA類を受けるもので、口径9.5cm、底部には回転ヘラ切りの跡がある。焼成は良好である。

銀環〔第5図(9)(10)〕は径2cm、中空の銅芯に銀箔を張り付けている。

(5) 調査のまとめ

本墳は玄室部を除き、殆ど残存せず、墳丘や石室の詳細については不明な点が多い。築造時期は、現存する遺物(A類)が初葬に伴うものとすると7世紀中葉と考えられる。またB類の土器は7世紀後半に行われた埋葬に伴うものであろう。

次に、杯蓋に比べ杯身の出土点数が少ないことが目を引く。これは、盗掘者が塊として利用するため杯身を選んで運び去ったものか。

他に注目すべきことは、副葬品に鉄器類や玉類を一切含んでいなかったことである。これは盗掘により持ち去られた可能性より、当初より副葬されてなかった可能性が強い。

ともあれ今回の調査で、県下では最も新しい段階に属する古墳の資料が得られたことは大きな収穫であった。

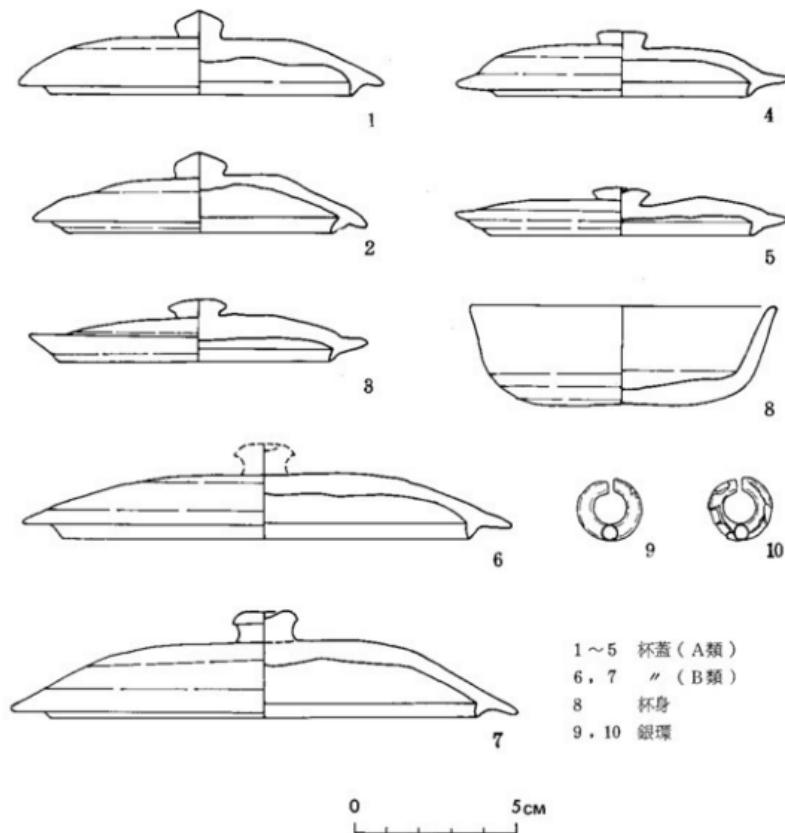
なお調査終了時に、3名の中学生が対岸の南岡丘陵より出土したと言って須恵器片を多数持参した。出土地は丘陵東斜面で、縦1.5m、横2m程蒲鉾形をした登窓の断面が現われていた。圃場整備事業によって、焼成部を断ち割られたようである。窓は出土須恵器より6世紀末墳に使用されたもので、山辺古墳出土遺物よりは古い。



第4図 玄室内遺物出土状況

調査は、これ以上窯跡に手を加えないとの事なので、掘削された土中より須恵器片を探取して終了した。しかし今後予定されている道路改修工事の際には、保存について十分留意する必要がある。

なお窯跡は、高額窯跡と命名し、文化庁に遺跡発見届を提出するよう処置した。



第5図 出土遺物実測図

第6図

- (1) 玄室の石組みと床面
- (2) 奥壁の掘り方(外側)
- (3) 銀環出土状況
- (4) 須恵器杯蓋出土状況
- (5) 高額窯跡出土須恵器片



(1)



(2)



(3)



(4)



(5)

尾ノ背寺跡

所在地 仲多度郡仲南町大字七箇字辻尾

調査期間 昭和54年10月8日～同54年11月8日

調査担当 斎藤賢一・伊沢肇一

(1) 調査の経過

昭和53年度におこなわれた「墓の丸」の緊急調査により、尾野瀬山一帯が中世寺院跡と確認された。しかし、その性格・規模はなお明確ではなかったので、これを明らかにし、史跡として保存するために調査がおこなわれることになった。調査は、国庫補助を受け、仲南町教育委員会が主体となり、県教育委員会の援助のもとに、遺跡の規模・性格を把握するため測量図の作成、遺構の検出を重点としておこなわれた。調査区は、「墓の丸」の南側に位置する谷筋の標高470mにあるテラス状地形に第1調査区、また、その谷筋の上方、尾ノ瀬神社のすぐ下の標高約520mにある比較的残存度の良好な平坦地に第2調査区を設けてこれを調査した。さらに、尾ノ瀬神社周辺及び東麓斜面で表層に見られる遺物も採取した。

(2) 遺跡の概要

尾ノ背寺跡の在る尾野瀬山は、東西に連なる阿讃山脈から北に派出した一支脈に属している。背後には阿讃山脈を背負い、前面には讃岐平野を配し、北に開けた展望を有する。財田川に臨む北麓は比較的急峻で、いくつもの谷を擁している。標高は577mを測る。

尾ノ背寺跡は、尾野瀬山の東・北麓のはば標高470m～540mの間にあって、その寺域はおよそ40000m²の広がりをもつ。寺跡比定地の一角(標高530m)には、現在尾野瀬神社が建立されている。ここは尾ノ背寺の本堂跡に比定されており、神社周辺では古瓦が多数表層に見られる。また、神社の東側斜面には数段の平坦地が認められ、平坦地を設けるために築かれたと思われる石垣が残存している。

(3) 遺構について

今回の調査は2カ所にわたっておこなわれた。先ず、昨年度調査のおこなわれた「墓の丸」の南側の谷筋にあって、標高470mを測る平坦地に第1調査区を設定した。この平坦地は、谷



第1図 遺跡位置図

筋の急峻な斜面にあっては南北に細長く、東西幅10m、南北長35mの約300m²の広さをもつ。上方から流入したと思われる土砂にまじって砂岩礫が多数見られる。大きなものは径が60~70cmほどもあるって、遺構の検出には困難をきたした。

平坦地の中央部地盤上に検出された礎石は、柱間幅2.1mを測る。南北に桁行4間を測り、梁間は2間を測ることが確認された。礎石に用いられている石材は、尾野瀬山を形成する泥岩風化上層に多く含まれている砂岩の自然石であるが、特に偏平なものが選ばれている。このほか、礎石列より約1m東の位置には建物とほぼ平行に染かれた石列が検出された。長さ7mを測るが、そのうち約2mは特に大きめの石を用いてしっかりと架かれており、両側端の石は「仕切」を示すかのように偏平な石を横長に立てている。礎石との位置関係から、建物に伴うものと思われる。

平坦地を形成する際染かれた石垣は、平坦地の東側を廻っており、長さ約30m、高さ2mを測る。用いられている石材は砂岩であるが、南端付近では径1.5m近くもある自然石がそのまま利用されている。それに対して北半は径10cmほどの小さななものから、径70~90cmを測る大きな石が用いられている。それらの石は、多くが偏平であり、丁寧に積みあげられている。

一方、第2調査区は、第1調査区と同じ谷筋にあって、尾野瀬神社に近い標高520mを測る平坦地に設けた。この平坦地は、第1調査区を設けた平坦地にくらべて狭く、東側縁辺にある石垣の遺存状態も良好とは言い難い。しかし、尾ノ背寺本堂跡に比定されている尾野瀬神社境内に近く、遺構の検出が期待された。平坦面からは、4つの土壇とほぼ東西に並ぶ長さ2.8mの石列が検出されたが、礎石は検出されなかった。このほか、径10~20cmのピットか25個検出されたが、建物跡の確認はできなかった。上壇には巨大から人類大までの石が埋められていたが、規則性は見られなかった。また、土壇の形も不定形で、径：深さも異なっている。石列は、南の面が崩えてあり、第1調査区で検出されたものと同じ性格のものと思われるが、石材や石の大きさ、加工の点で若干の相異が認められる。東縁辺に残る石垣は、高さ2.5m、長さ3mにわたって残っているのみで、他の部分は崩壊したものと思われる。基底部では偏平な石を丁寧に積みあげているが、上端付近では小礫を無難作に積みあげた感をうける。

調査区を設けた谷筋には、このほかにも石垣を伴う平坦地が数段認められるが、位置的に谷筋の中央にあるためか、流上による埋没あるいは流失によって遺存状態はよくない。

(4) 遺物の出土状況

今回の調査区は、ともに急峻な斜面に立地する平坦地のため、長年月を経過して石垣や土砂が流失しており、昔日の面影を僅かに留めているに過ぎない。その為、遺物の出土状況は大変悪く各層位間に混乱が認められた。遺構に伴うものとしては、第1調査区の遺構面と第2調査区の土壇から土師質土器・瓦質土器が少量出土したにすぎない。出土した遺物の大半は、攪乱を受けた第1層及び第2層から出土したものである。

谷筋からは土師質土器片とともに瓦片、磁器片が表採された。特に瓦片は尾ノ背寺本堂跡に



第2図 出土瓦拓影

比定されている尾野瀬神社周辺から多数表採された。神社周辺では、表土下60~80cmまで瓦片の包含が認められる。

(5) 主たる遺物

出土遺物の多くは土師質土器と瓦片である。土師質土器は小皿と壺が大半を占めるが、完形品はほとんど無く小片ばかりである。瓦片の多くは表採品である、その大半を平瓦が占める。丸瓦、鎧瓦、宇瓦も若干出土した。瓦片は、胎土・焼成から3つのタイプに分類できる。先ず、砂粒をあまり含まない精良な胎土だが、焼成が甘く淡黄土色を呈するものをタイプⅠとした。次いで、砂粒をあまり含まない精良な胎土だが焼成がやや甘く灰黒色を呈するものをタイプⅡとした。さらに、比較的多く微砂粒を含むが焼成が良く堅緻であり、灰黒色を呈するものをタイプⅢとした。数量からみるとタイプⅢが最も多い。第2図の(1)はタイプⅢに分類される鎧瓦である。周縁は無文で高く、外区に連珠文を配した三巴文である。巴文の尾が細長くのびて内区と外区を分ける働きをしている。(2)はタイプⅠに分類される複弁八葉蓮花文鎧瓦である。(3)はタイプⅡに分類される菊花唐草文字瓦である。宇瓦は8タイプとも出土したが、文様は同一のものである。

(6) まとめ

2カ年にわたる調査の結果、尾ノ瀬寺の寺域はかなり広範囲に及ぶものとの見方が有力となつた。ところが、寺域の広さに比べて発掘調査をおこなった面積は微々たるもので、全体の規模を正確に把握する迄には至っていない。僅かに第1調査区で建物礎石が検出された。瓦片がほとんど検出されないことから、茅葺き若しくは檜皮葺きの建物であったろうことがわかった。また、尾ノ背寺本堂跡に比定されている尾野瀬神社境内付近に瓦片の集中が見られることか

ら、瓦葺きの建物がこの辺りに在ったこと等が推定される。しかし、尾ノ背寺における伽藍配置の問題は依然として残されており、今後の調査によって解明されなければならない大きな課題である。（齊藤）

第3図 尾ノ背寺跡遺構

第2調査区（西から）



第1調査区 磨石列
(東から)



第2調査区 石列
(東から) | 第1調査区 石列
(北から)





第4図 尾ノ背寺跡現況測量図

青ノ山第7号墳

所 在 地 丸亀市飯野町東分字山下500番地の2

調査期間 昭和54年4月21日～5月12日

調査担当者 真鍋昌宏・伊沢肇一・竹下和男

(1) 調査の経過

昭和54年4月上旬に丸亀市教育委員会から、果樹園造成の為の整地に伴い青ノ山第7号墳（通称・竜塚）の一部が破壊されたとの連絡があり、現地を確認の上協議し、残存部の調査を行なうことになった。これに伴い、吉岡和彦（丸亀市文化財保護委員会委員長）を団長とする、「青ノ山第7号墳発掘調査団」を結成した。調査は、4月21日に調査器材を搬入し、4月23日より着手した。

(2) 立地と環境

青ノ山は、丸亀市と宇多津町にまたがり、標高224.5mを計る。山頂より南に派生する数本の尾根の一本の稜線上に位置し、同一尾根上には、第6号墳（既調査・保存）^{註1}が立地する。青ノ山古墳群の精密な分布調査は行なわれていないが、山頂をはじめ、東麓を除く山麓に散在しており、中でも南麓のあり方が一番顕著である。西側尾根先端には、前期古墳の吉岡神社古墳（前方後円墳）が立地している。

(3) 調査の概況

第7号墳は、古くから開口しており天井石は失われていた。

調査時の状況は、玄室部が崩壊しており、羨道部のみが残存、墳丘上をブルドーザーで整地していたため、側壁の一部が原位置を離れ、羨道部が埋もれていた。

調査で確認したのは、①羨道部の規模、②床面の状況、③側壁のあり方、④閉塞部の状態、⑤石室掘り方、⑥外部施設の有無、⑦墳丘の規模などである。

本来は、両袖の横穴式石室であり、玄門石以下、羨道部はほぼ旧状を呈するものと考える。



第7号墳（竜塚）位置図

羨道部規模は、長さ 6 m、残存高 1.3 m、幅 1.3 ~ 1.5 m を計る。床面は、後世のカク乱を受け、須恵器杯身の破片が出土したのみである。側壁は、両側壁とも玄門部よりの部分は巨石一石で構築されており、羨門部よりの部分は、長方形の角石を乱雑に積んでいる。東側壁羨門部は、地山整形 + 互層積み + 積石という、他に類例を見ない構造である。

羨門部閉塞は旧状を残しており、互層積みを用いた土積閉塞であることが確認された。また、閉塞部断面の観察から、二度の閉塞が見られ、追葬を裏付けることがわかった。

石室掘り方は、羨道部同様の長方形を示さず、羨門部の方で狭くなる羽子板形を呈す。また、羨道部前面にトレンチを設定したところ、墓道が確認され、墓道全面を検出した。

墳丘規模は、西側に設定したトレンチを観察しても墳丘盛土が確認できず、不明である。

(4) 遺物の出土状況

遺物は、羨道床面・閉塞土中・墓道内の三ヶ所より出土しており、中でも、閉塞土中・墓道内からは完形の杯が出土している。状況として、第二次閉塞土中と墓道内とは時間差が考えられ、第二次閉塞の際には、墓道が埋められていたことがわかった。

(5) 主たる遺物

閉塞土中の杯蓋と墓道理土中の杯身・高杯などである。前者は、薄く焼成の良好なもので、特徴的な遺物である。この他、墓道直上からは、鉄器も確認されたが、その器種は不明である。

(6) まとめ

第7号墳の調査の結果、次の諸点が明らかになった。

- ①羨道部閉塞は、後世のカク乱を受けておらず、埋葬時のものであり、土積閉塞であること。
- ②東側壁の羨門部の構造が特異であり、石室掘り方との関係から注目されること。
- ③墓道が検出され、墓前での土器供獻のあり方に一例を加えた。
- ④出土した須恵器から、6世紀後半と末頃の二回の埋葬が想定され、土積閉塞のあり方にも合致する。

なお、本報告書は、昭和55年度中に刊行する予定であり、今回の記載は概要報告となるので、詳しくは本報告書によられたい。（真鍋）

注1 「青ノ山6号墳調査報告」丸亀市教育委員会・香川県教育委員会 1977



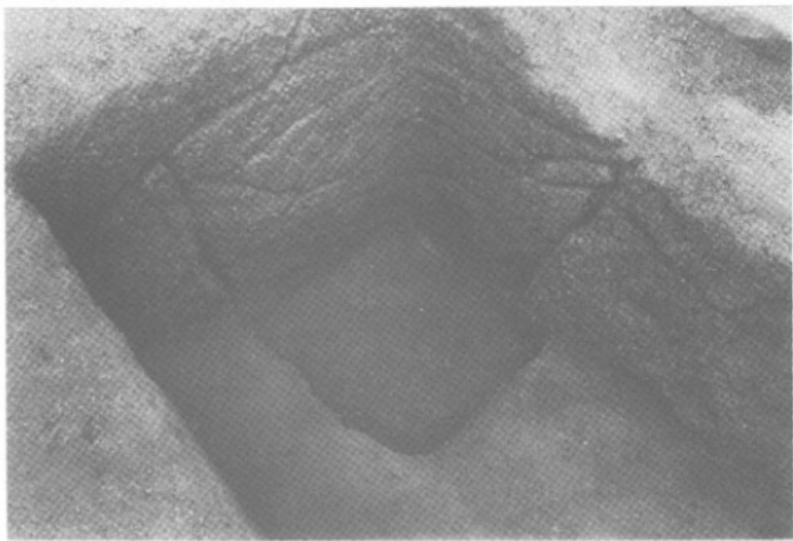
玄門部（玄室側より）



羨道部全景（手前は墓道）



義門部（西側壁）



石室掘り方と版築の状況



上面検出時墓道全景（羨道部側より）



墓道埋土内須恵器出土状態

青ノ山1号窯跡

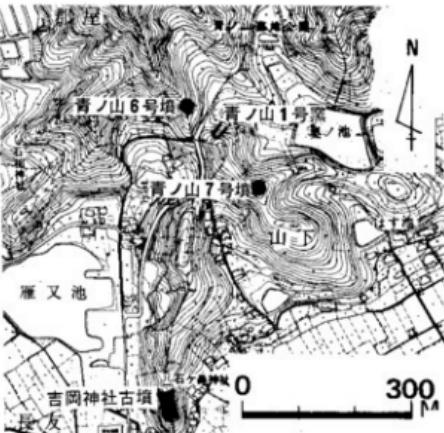
所 在 地 丸亀市飯野町東分字山下

調査期間 昭和54年5月14日～同年6月1日

調査担当 竹下和男・伊沢肇一・真鍋昌宏

(1) 調査の経過

青ノ山の南西に派生する尾根を整地及び果樹園の造成で削平中、青ノ山7号墳（通称竈塚古墳）が表道部を残して崩壊したとの連絡を丸亀市教育委員会が受け、丸亀市の要請で県教委が緊急発掘調査団を送った。この調査中、地元の研究者である金沢氏より、7号墳から北西に150m離れた斜面の削平中の耕土より窯跡片数点と須恵器片多数を表探したと告げられ、調査団が耕土を除いたところ窓の一部が残存していることが判明し、青ノ山1号窓と命名した。ただちに市教委・県教委の協議の結果、7号墳に統き同調査団が緊急発掘調査することになった。調査が進むにつれて、県下では唯一の須恵器窓であることが確認されたので、保存を前提として完掘はさけ、規模・構造・残存状態を調査して終えた。また、土地造成が7号墳・1号窓の立地する尾根全体に及ぶ為、



周辺の遺跡

未造成地区の埋蔵文化財の分布調査・試掘を行ったが他には確認できなかった。また、1号窓の保存方法については奈良文化財研究所の沢田正昭氏・牛川喜幸両氏の指導を受けた。10月31日市教委・県教委立会の中で埋め戻し、現在は保存工事を待つのみとなっている。

(2) 遺跡の概要

青ノ山は丸亀市と綾歌郡宇多津町にまたがり標高224.5mを計る。頂上付近は古銅輝石安山岩、他はややわらかい花崗岩類となる。その南麓は中腹より2条の尾根に分岐し、1つは真南に走り先端近くに吉岡古墳を有し、1つは南東に走り字山下に至る。青ノ山1号窓は後者の尾根の北東斜面中腹に立地する。

調査前の状況は整地及び果樹園造成のための削平が半ばまで進行していたため、窯室の煙道・燃焼部・前庭・灰原は完全に消失しており、焼成部の大部分のみが残存していた。天井部の高さにまで削平されていたので地中をくり抜いて築いた企地式（トンネル状）の窯室という様相は全くなく、遠い過去に天井部が崩れ落ちたらしく窯体内部には土砂が充満していた。

(3) 遺構について

窯体 窯体の規模は残存部分のみで主軸長さ 6.7m, 最大巾 2.0m, 主軸方向 S-20°-W, 標高は 40.7m～43.4m を測る。

イ 焚口・燃焼部 残存部分の最下部でなお床面が 15° の傾斜を示していること、窯体巾が下部に近い程、ややせばまっていることから、ともに工事により消失したと考える。

ロ 燃成部 残存部のすべてが焼成部にあたり、長さ 6.7m, 最大巾 2.0m, 床面の傾斜角度は奥壁に近づく程急になり、最下部で 15°, 中央部で 19°, 最上部で 30° となる。最下部の傾斜の具合等から本窯の焼成部はあと 1m 弱はあったと推測される。障壁は認められず、天井は中央部西側が最も残存状況が良く、ほぼ主軸線に届く。これより断面を復元すると窓内の高さは最も高いところで 130cm 程と考えられる。床面・壁面・天井面の総ては 1 面の花崗岩より成る。粘土を塗った形跡も修復した痕跡も皆無である（香川大学教授坂東祐司・助教授谷山櫻の両氏の窯壁鑑定）。最も温度の高い還元焰を受けたと思われる天井部窯壁の表面はアメ状に溶けガラス風の光沢さえある暗緑青色で、壁面は緑青色、床面は土器を並べたためか緑青色と赤褐色の斑を呈していた。崩壊した壁や露出した壁を観る限り緑青色の厚さは 5cm, その外側に 10～15cm の赤褐色化した花崗岩の地山が続き、さらに外側は周辺の地山と何ら変わることろが無い。煙道に近い場所の床面は不規則な階段状で、急な傾斜面にも土器を並べ易くしたと考える。

ハ 奥壁・煙道部 奥壁にあたる部分は直径 50cm 程の凹みで、立ち上がりもなく煙道に統一していたと思われる。削平前の地形から推定すると煙道の高さは 2～3m となる。

(4) 遺物の出土状況

イ 窯体内 出土遺物は 20 片程の須恵器片ですべて床面より 5～20cm 上から出土した。窯体の下部より出土した遺物は接合でき壁の口縫の一部を形成した。また奥壁近くで出土したもののは杯蓋で宝珠つまみを有する小型であった。ともに 7 世紀初頭の頃に見られる須恵器である。窯体のほぼ中央部には窯壁の大きな破片が床面に接して出土し、小さな破片は窯体を埋めたどの土層からも検出された。

ロ 窯体外 烧成部の他は完全に消失していたから断定しかねるもの、整地工事直後に金沢氏が表探した須恵器片 20 数片はほぼ灰原のものとみてよい。

(5) 主たる遺物

イ 杯蓋 奥壁近くから出土したもの。口径 9.6cm, 深高 3.6cm, つまみ径 1.2cm, つまみ高 0.9cm。口縁部は外下方に下り、端部は丸く、内傾するかえりを有し、かえり端部は鋭い。天井部は平らに近いが、胎土内に気泡があったらしく、焼成中にできたと思われる空洞がいくつも見

られる。マキアゲ・ミズヒキ成形で天井部外面は回転ヘラ削り調整、他は回転ナデ調整である。内面中央部に一定方向のナデ調整がある。ロクロ回転は右方向。色調は青灰黒色。胎土は細かいが少量の砂粒を含む。焼成は不良でややもろい。劣弱欠損していた。

ロ 杯蓋 金沢氏の表採によるもの。口径13.8cm、器高3.9cm。口縁部は外下方にドリ、端部はやや丸い。天井部はやや丸く高い。マキアゲ・ミズヒキ成形。天井部外面ヘラ切り及び回転ヘラ削り調整。他は回転ナデ調整である。内面中央部にナデ調整がある。ロクロ回転は右方向。色調は灰黒色。胎土はやや荒い。焼成良好、堅緻。残存4%。

ハ 杯身 金沢氏の表採によるもの。口径11.2cm、器高4.1cm。体部、口端部は上外方にのび、端部は丸い。底部は平ら。マキアゲ・ミズヒキ成形。底体部外面は回転ヘラ削り、他は回転ナデ調整で、底部内面に一定方向のナデ調整。ロクロ回転は右方向で色調は外面が青灰色、内面が青灰白色。胎土は細かく焼成も良好、堅緻。一部灰をかぶり釉薬調を呈する。残存4%。

(6) 遺跡の性格

発見当時、既に窯本体が露呈していたものの操業時は全地下式の窯であったことは間違いない。これは県下では須恵器窯として唯一のもので貴重な資料といえる。

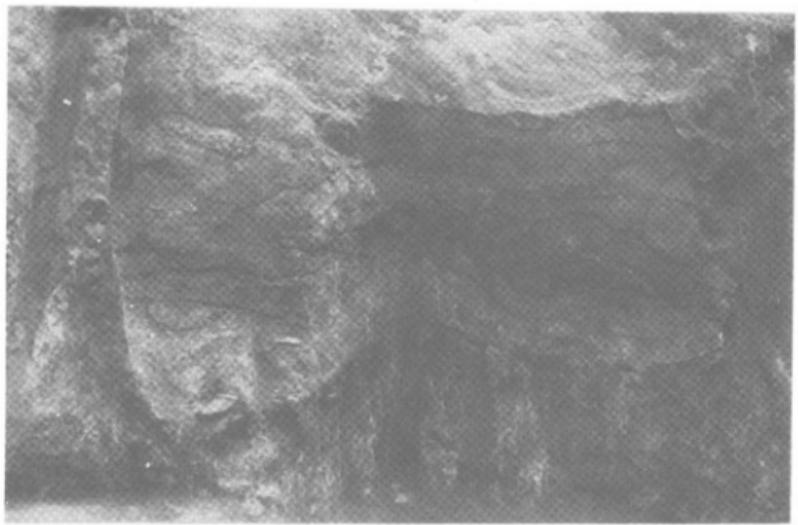
窯体内及び金沢氏の表採遺物を合わせると、須恵器森浩一編年によれば三期中葉、三期後半、四期前半の三型式の須恵器（杯身・蓋、台付蓋の台、甕）の破片の出土をみている。従って6世紀後半から7世紀初頭にかけて8度以上の操業がなされたことになる。操業開始時期からしても県下で最も古い時期の窯と言え、青ノ山古墳群の築造と同時期であり、副葬品の須恵器を供給したと推測できる。

本窯は最後の操業後もしばらく土管の如く地中にあったと考える。その間に最後の操業時の須恵器破片等は流失し、あるいは流入する土砂と共に傾斜の緩い下部に堆積した。やがて焼成部の中央部の天井が落ち徐々に窯内に土砂の充満するところとなつたであろう。

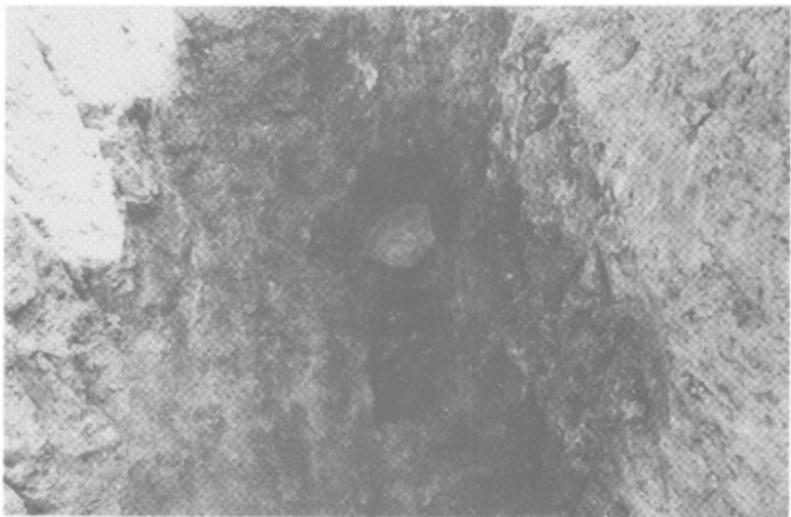
保存を前提とした発掘調査であったため完掘は避けたとは言え、大きな問題点が残されている。それは、1000℃を超える還元焰を受けた窯壁が青ノ山の地山をくり抜いた花崗岩そのものであり、スサ入り粘土を用いた形跡が全く無いことである。やや柔かい岩盤であったがために1度目はそのまま窯壁として使用が可能であったとしても2度目、3度目の操業前には窯壁は甚だ堅い岩盤と化していた筈である。それが3度以上の操業にも耐え、なおかつ亀裂一つも残さなかつたのは操業前の急入りな空焚きによるものか、あるいは他の方法があるのか今後の調査・研究に待つところが大きい。（竹下）



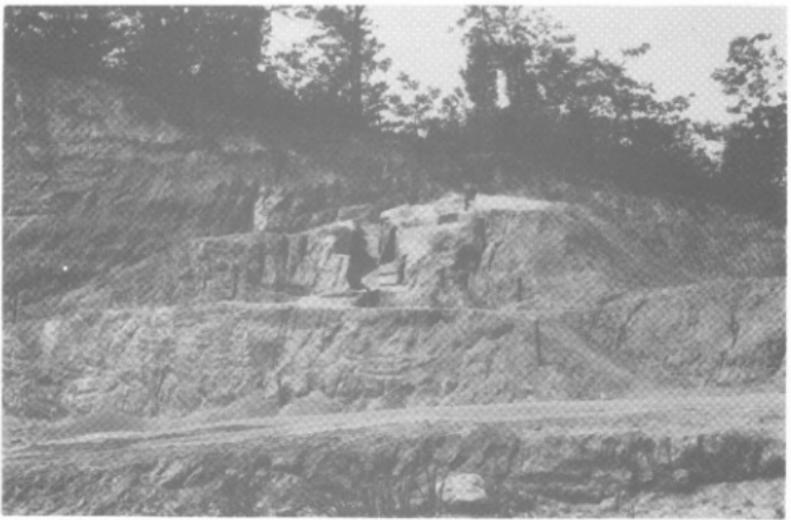
発掘前全景



発掘前の焚き口付近断面



奥壁付近杯蓋出土状況 下の方形は床面までの掘り下げ



発掘終了後全景

高屋遺跡

所在地 坂出市高屋町鷲北 1029番地

調査期間 昭和54年4月16日～同54年5月19日

調査担当 斎藤賢一・大砂古直生

(1) 調査に至る経過

坂出市高屋町に所在する高屋遺跡は、昭和50年におこなわれた溝の改修工事により、製塙土器が出土したことからその存在が知られた。その後、昭和51年2月に坂出市史談会が中心になっておこなった調査により土器包含層の存在が確認された。

今回の調査は、堆肥舎建築に伴う事前調査としておこなわれた。対象面積 621 m²のうち約 150 m²を発掘調査した。

(2) 遺跡の概要

五色台の一角を占める白峰山から派出した一支脈の東山は、標高 167.9 m を測る。東山の北には標高 88.8 m の北峰がある。そこから西へ延びる尾根

筋には、すべり山古墳群・絳ノ田尾古墳等がある。また、東山の西には雄山・雌山があり、ここには、前期の古墳群が存在する。

高屋遺跡は東山の西麓に位置し、雄山・雌山・東山・北峰に囲まれた小さな入江地形の南端に



第1図 周辺の遺跡

所在する。この地点は、北に向って傾斜する緩斜面の傾斜変換点に当り、標高 2.5 m を測る。調査対象地北隣りの水田との比高差約 1 m の段はほぼ東西に延びており、弥生時代の汀線を思わせる地形である。昭和51年におこなわれた調査において、水田の表土下40cmで砂屑が検出されている。

調査対象地は畑地で、表層には小礫に混じて製塩土器片が散見されるが、すぐ東隣りの畑地や北隣りの水田には土器片が見当らず、遺跡の範囲は調査対象地に該当する東西約80m、南北約 1m と思われる。しかし、当該地の西約 150 m の地点から土器片・炭屑が検出された例が知られており、汀線に沿って数カ所で製塩活動がおこなわれていたことが推定される。

(3) 遺構について

今回の調査では、製塩遺跡に直接結びつく炉跡やタタキ面など主要な遺構の検出はできなかった。しかし、これらと密接な関係にある鹹水の貯水槽或いは泉と思われる土括が検出された。この他、包含層下に性格不明の溝が検出された。

土括 調査区南東隅において検出された土括は、径 1.8 m、深さ 0.4 m を測る。土括南側部分に数個の疊が検出されたが、規則性は見られず、転がり込んだものと思われる。また、土括底部には静水下にできる粒子の極めて細かい良質の粘土が検出された。この粘土が土括壁面に貼られていたものか自然の堆積によるものかは識別できなかったが、貯水槽或いは泉として利用されていたものと思われる。

溝 ほぼ東西に設けたトレンチに沿って、幅 1.5 m、深さ約 0.2 m の溝が検出された。この溝は、全長 82m のトレンチ西端付近にはじまり、緩やかに傾斜しながら深さを増している。溝はトレンチ東端よりさらに東に延びており、範囲を確認できなかった。東隣りの畑地に土器片が散見されないことから推定すると、溝は間もなく消滅して、包含層も薄くなるものと思われる。

(4) 遺物の出土状況

出土した遺物のうち、遺構に伴うものは少なくて大半は包含層から出土したものである。しかし、包含層に含まれる土器片は混在しており、層位的な分析はできなかった。包含層は、調査区東端で最も厚く約50cmを測る。包含層にはいわゆる土器ブロックをいくつか検出した。土器ブロックは主に製塩土器部で構成されており、脚部の混入は稀である。このことは、包含層から多く脚部が出土したと対比をなしている。製塩土器はほとんど壊れた状態で出土しており、脚部から口縁端部まで整っているものは一点にすぎなかった。これに反し、甕・壺・は完成もしくは完成形に近い状態で出土したものが多かった。また、上からの圧力で押し潰された状態で出土した例も多い。特に土括の周縁部や溝の肩部に於てこうした土器の集中が見られた。

(5) 遺物について

調査区から出土した土器は、弥生時代終末前後と思われる製塩土器、弥生時代中期末の甕、弥生時代後期後半の甕・壺・壺・高杯・ミニチュア土器及び七節器である。出土した土器の大

半は製塙土器の脚部である。次いで多数を占めるのが弥生時代後期後半の塊・甕である。塊と甕は製塙土器に類似したつくりで、砂粒を多く含み焼成も不良なものが多い。内外面の調整は主にヘラ削り・刷毛目・叩き目でなされており、概して粗雑である。壺は小型のものと比較的大型のものが若干出土した。

a . 製塙土器(1~11) 全て脚台付のもので、内面は丁寧なナデ調整がなされている。器壁外面の調整から、ヘラ削りのもの(1~3)、ナデ調整のもの(4・5)、叩き目のもの(6・7)に分類される。さらに器形から、脚部が矮小化したもの(8~11)が区別される。いづれも脚部には手捏を示す指頭圧痕が明瞭である。また、二次的な加熱を示す器壁の剝離・変色が見られる。

b . 塊(12~20) 口縁部の径が11~18cmの小型のものと、16~20cmの大型のものに分類される。(12)丸底で外面底部付近に叩き目、内面にヘラ磨きの跡が残る(13)平底で外面ナデ、内面は下から上への刷毛目、(14)平底で外面底部付近に叩き目、内面下から上へのヘラ磨き、口縁部に刷毛目調整が施されている。(15)底部に円盤状の粘土塊を貼りつけている。外面には叩き目のあと下から上方へのヘラ削り調整、内面ヘラ磨き(16)底部に粘土塊を貼りつけている。外面に叩き目と刷毛目調整、磨耗著しい。内面ヘラ痕(17)丸底で内外面ともに刷毛目調整、器壁の剝離が著しい、(18)丸底で外面ヘラ削りの後刷毛目調整、内面刷毛目(19)平底で外面叩き目の後刷毛目調整、内面下から上方へのヘラ磨き(20)外面に斜め上方へのヘラ削り調整、内面ナデ調整(12)(15)(19)(20)には黒斑が認められる。

c . 甕(21~24) すべて平底である。一部のものを除き内外面ともに調整は粗雑で、黒斑を有するものもある。(21)焼成が甘く脆い、二次的加熱によるためか器壁内外面ともに剝離が著しい、(22)外面に顯著な叩き目を残す、内面は下から上方へのヘラ削り口縁部に刷毛目調整(23)外面には叩き目の後刷毛目調整 内面底部付近に指頭圧痕がみられる。体部はヘラ削りを主とするが上半には刷毛目が見られる。口縁端部は「く」の字状に外反するだけの単調な(21)(22)に較べ、一度「く」の字状に外反した後再び内傾する。(24)他のものに較べて堅緻である。内面・外面及び断面も丹彩を施した如く赤茶色を呈す。外面には叩き目の後刷毛目調整 内面はヘラ削りの後体部上半にヘラ状工具によるナデ調整。

d . 壺(25~27) 図示したものは大型に属するもので、焼成は概して軟調で厚ぼったい。口縁端部にヘラ描き文。

(6) まとめ

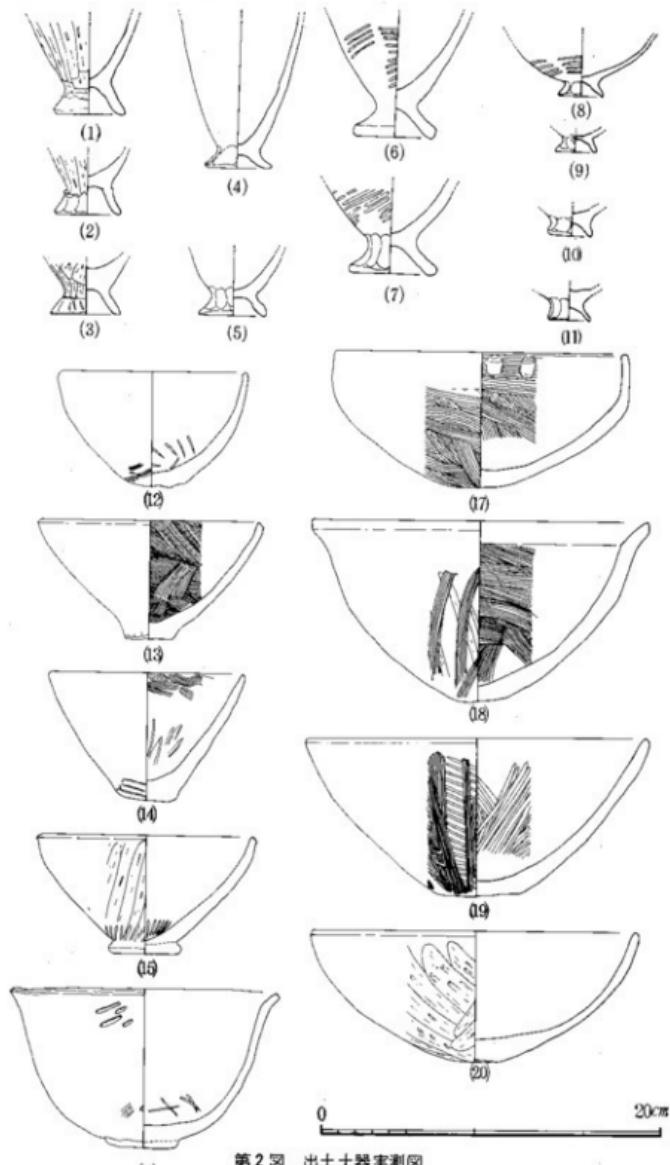
海面変化によって生じた海岸段丘上に広がりを見せる包含層には、いわゆる脚台付制塙土器の破片や弥生時代の塊・甕・壺が多く含まれていた。これらの土器は一様に多くの砂粒を含み、粗い調整痕を残すという共通点をもちつつ、多様な形態を示している。しかし、製塙土器についてみれば、ヘラ削り調整のものと脚部が矮小化したものは数的に少なく、ナデ・叩き目調整

がなされた脚部のしっかりしたものが主体を占める。こうした調整痕や脚部の形態から、中心は弥生時代後期後半（～後期終末・古墳時代初頭）に位置づけられるであろう⁽¹⁾。

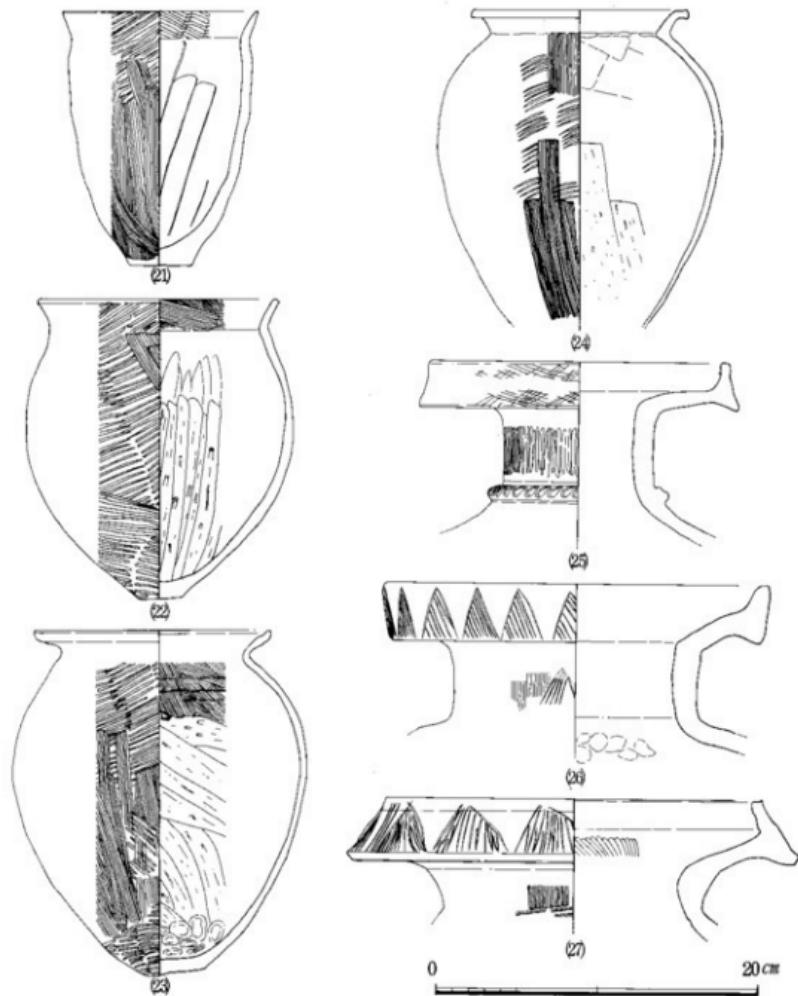
また、壺・甕・壺についても弥生時代中期後半の様相を呈するもの、或いは古墳時代初頭の様相を呈するものも少量ながら見受けられる。しかし、製塙土器同様大半は弥生時代後期末の様相を呈している。

数多く出土した土器の主体が弥生時代後期末の相様を呈することから、弥生時代後期末頃との付近で製塙活動がおこなわれていたことは確実と思われる。しかし、その規模、範囲については確かめられてはいない。また、製塙土器とともに出土した壺・甕などの土器がどのような性格をもつのかも、今後の研究課題である。（斎藤）

(1)岩本正二「弥生時代の土器製塙」『考古学研究』89



第2図 出土土器実測図



第3図 出土土器実測図

讃岐国府跡

(第五次調査)

所 在 地 坂出市府中町本村 5138

調査期間 昭和54年12月6日～昭和55年3月31日

調査担当者 卍礼良典・斎藤賢一・菱部明夫

(1) 調査の概要

昭和54年度の讃岐国府跡の発掘調査は、昭和54年12月6日から昭和55年3月31日まで、坂出市府中町本村5138番地の水田で実施された。国府跡の調査はこれまで8年目を迎え、5地点を発掘したことになる。

調査地点は、推定国府域の中央部や北西寄りに位置し、昨年度の確認調査地点から東へ約100m離れている。そして、木下良氏によって初めて推定された国府域の北東隅にあたる。⁽¹⁾

発掘調査にあたっては、国府域内に位置していると考えられる開法寺の塔の中心軸にあわせて、トレンチ方向をN-23°20'Wとした。

この調査で検出された主な遺構は、近世の耕作地跡・溝、平安時代末～鎌倉時代前半頃の掘立柱家屋跡・井戸跡（覆屋をもつ）・石敷き炉跡・土塙墓（？）・溝・土塙、平安時代末より古く7世紀後半より新しい倉庫跡・櫛列跡・溝、7世紀後半代の溝などがある。

このうち、近世・中世の遺構は調査地の南側に多く検出され、讃岐国府の一部とみられる倉庫跡と櫛列跡は調査地の北側で検出された。

近世の耕作地跡は、幅0.2～0.3mの溝を格子状にめぐらし、1×14m前後の長方形区画をつくり出している。長方形区画は23個以上検出され、さらに西側へ拡がるものと思われる。区画内の土は、灰褐色土と灰黒色土がブロック状に混合していることから、耕作にともなう攢乱であると思われる。また、方形区画の東側にそってほぼN-80°-Wに方向をとった溝も検出された。

平安時代末～鎌倉時代前半の遺構のうち、家屋遺構は2.2×3.0mの間隔をもつ4個の柱穴と、西・南及び北側の一部にめぐらされた、雨落ち溝と思われる浅い溝が検出された。

井戸跡は、掘り形の底に直径約40cm、高さ約26～29cmの曲げ物の上部に方形の井戸枠をつくったものである。掘り形は上縁で直径約1.7mの不整円形を呈し、深さは約2.4mを計る。



第1図 讃岐国府跡 54年度調査地

(1:25,000)

方形の木枠は、3段に横桟を組み、外側の1辺宛に幅約10cmの縦板を7枚程度並べている。横桟は、枘と枘穴をつくって組んだもので、下段で一辺約58cm、中段で一辺約65cm、上段で一辺約68cmの内法である。横桟が上広がりに組まれているため、縦板は下部では重ねている。井戸跡の周囲には多くの柱穴が検出されたが、そのうちの4個は井戸の覆屋の柱のものと考えられる。

井戸跡に近接して炉跡と思われる石敷き道構が検出された。幅約65cm、長さ1.5m以上、深さ約10cmの浅い掘込みの中に10~20cm大の平たい河原石を敷いており、河原石上には炭・灰が堆積していた。井戸跡との関係が注目される。

倉庫跡は東西5個、南北4個、合計20個の掘り形をもつ、4間×3間の総柱の建物であった。調査の都合上、倉庫跡の南東部は発掘しなかったので、検出した掘り形は16個である。

掘り形は、一辺1~1.5mの規模を持ち、方形を原則とする。建物の外周部分に比べて、内側の掘り形はやや小さくて浅い。掘り形の深さは一定しないが、いくつかの完掘例からすると、外側の掘り方の深さは80cm前後を計り、内側の掘り形は40cm前後の深さである。

5個の掘り形には柱根が残っており、これからみると、柱間は1尺約30cmで、東西7尺、南北6尺と考えられる。したがって、倉庫跡は、桁行(東西)28尺・約84m、梁行(南北)18尺・約54mの規模をもつことになる。

この掘り形は、平安時代末~鎌倉時代前半の包含層で覆われ、7世紀後半代の溝を切っているので、倉庫跡の年代はその間に比定できる。

また、この倉庫跡の南北方向は、トレントの方向と同じく、磁北に対して17°西偏(N-23°20'W)しているが、この方向は、国府域の南西部に位置すると考えられている開法寺の塔の中心軸と一致する。

倉庫の廃絶後、その南辺にそって柵列が東西に設けられており、6個の掘り形が検出された。ただ、倉庫跡の南西隅の掘り形に重複した柵列の掘り形はわずかに南にずれているので、これを別なものと考えれば、あるいはさらに南にも柵列が考えられるかもしれない。6個の掘り形から推定される柵列は、倉庫跡の東西方向よりわずかに正東西方向に近い。

今回の調査で検出された倉庫跡は、先述した特徴から、律令時代の讃岐国府跡の一端とみて良いと思われるが、これとほぼ同じ方向をもつ柵列も国府にともなうものと考えられる。

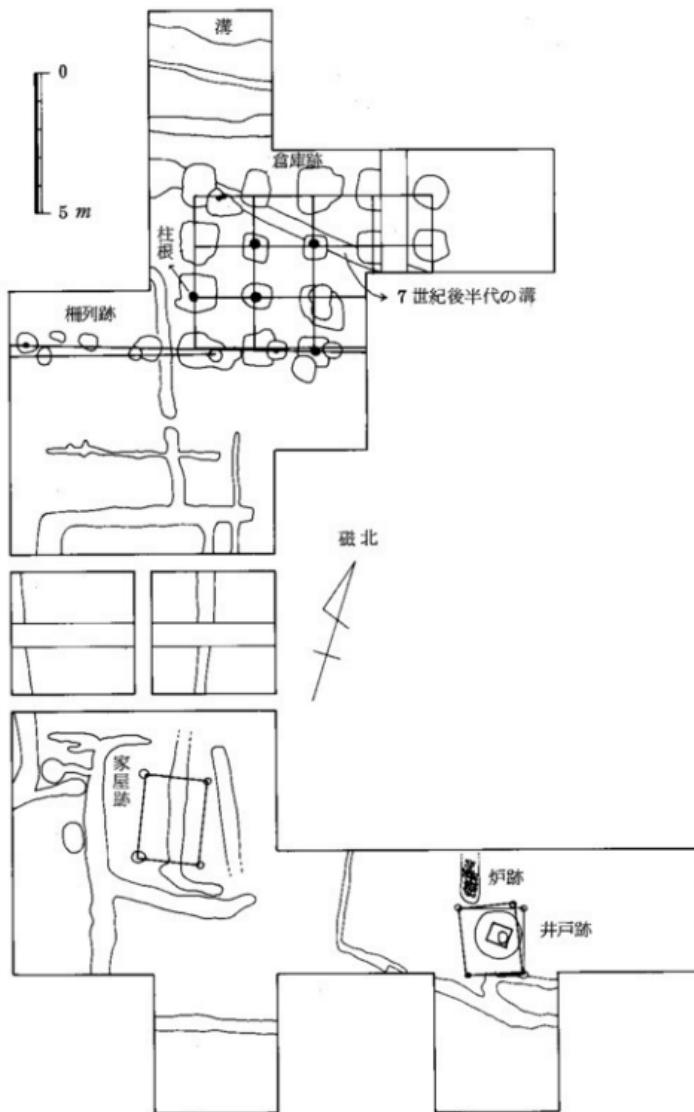
このように、昭和54年度の調査によって、讃岐国府の倉庫跡を検出し、これまで歴史地理学的に復元された讃岐国府の地割り方向がほぼ誤りないことを明らかにしたが、しかしながら、讃岐国府の規模と範囲、国府域の位置と規模、国府の成立と変遷・廃絶については今後に多くが残されている。



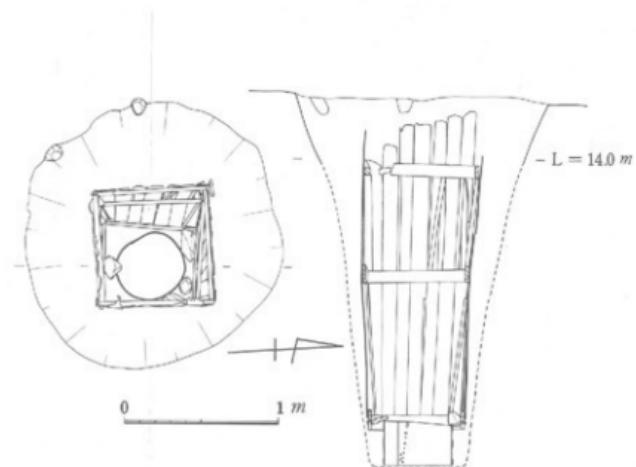
第2図 調査地区配置図（上方が北）



第3図 讃岐国府脉 54年度調査地（石垣の手前・右後方は城山）



第4図 主要遺構配置図



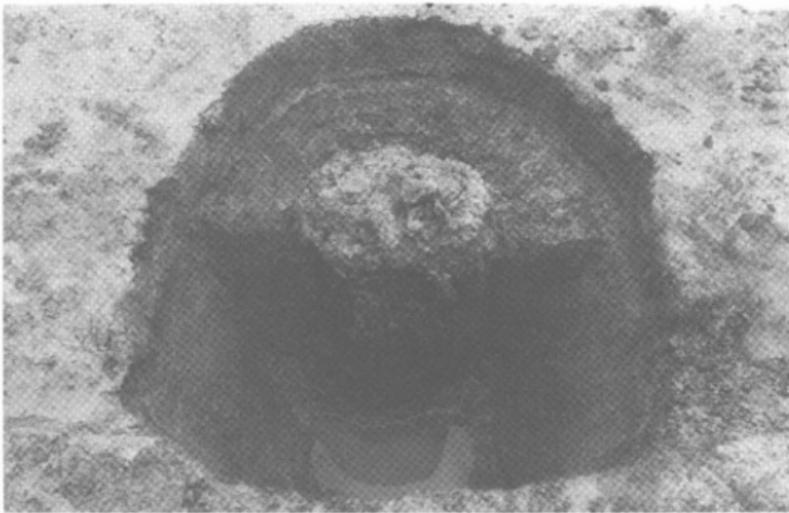
第5図 井戸跡実測図



第6図 調査地南部の遺構検出状態



第7図 井戸跡完掘状態



第8図 倉庫跡の掘立柱掘り形と柱根出土状態

註(1) 藤岡謙二郎編『日本歴史地理総説』古代編1975なお、木下氏はその後「国府の『十字街』について」『都市の歴史地理』1977において、国府城を現讃岐国庁碑付近に比定しなおしている。
(2) 川畠進・松本豊 「開法寺跡」『仏教芸術』116 1979

西村遺跡

(第一次調査)

所在地 香川県綾歌郡綾南町陶字西村北

調査期間 昭和54年7月2日～同55年3月25日

調査担当 沢井静芳・六車功

1はじめに

西村遺跡の発掘調査は二年次目にあたり、昭和53年度調査については既に「香川県埋蔵文化財調査年報」に報告されているとおりである。

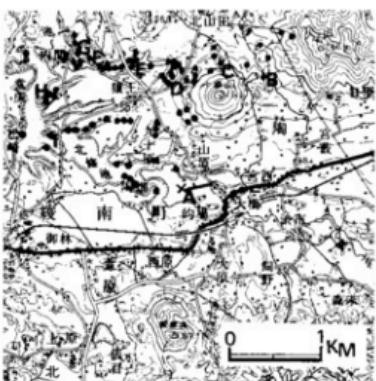
今年度調査対象となった地区は一般国道32号綾南バイパス建設工事計画に伴うもので、平安時代後半～鎌倉時代頃を中心とした時期の窯業生産地としての遺跡である。予備調査の結果、遺構存在の可能性が大きいと思われる前年度調査地点から凡そ100m北西へ寄った東西に延びる用地のうち11,870m²（最大幅40m、最小幅26m、長860m）を調査対象とした。そして、昭和54年6月30日、建設省四国地方建設局と香川県教育委員会との間に発掘調査契約が結ばれ、前記の期間において発掘調査が実施された。

なお、この報告は紙数の関係もあり十分なものではなく、詳しくは近日中に予定をしている、今年度の発掘調査報告に機会をゆずることをおことわりしておきます。

2調査の概要

綾南町陶地区は北部の十瓶山・火の山を中心として、その地名から察しられるように古来から窯業地として知られており、現在100基余りの、奈良時代～平安時代の窯跡（瓦・須恵器窯）が分布している。県内最大の窯跡群である。

この陶一帯は良質の粘質土を産する洪積台地であるため、谷地形がよく発達しており、かなり比高差のある台地を廻々に形成している。このうち西村台地は前年度調査を実施した地区を最高所として、南の富川、北のお寺川に挟まれた南北250m、東西600mの広がりをもち、西



第1図 陶窯跡群と調査地(XA)

- | | |
|-----------|-----------|
| A 西村遺跡調査地 | F 明神谷灰原 |
| B すべて窯跡 | G 田村神社東灰原 |
| C 十瓶山北麓窯跡 | H 庄屋原窯跡 |
| D ますえ窯跡 | I 池宮神社南窯跡 |
| E 丸山西窯跡 | |

に広がる北条池に突き出た台地となっている。窯跡の多く分布する十瓶山南麓とは、お寺川によって区切られている。

今回の調査地は西村台地の最高所から北、海拔高が2~8m下る水田である。旧来この台地も、処々に谷地形が発達していたのか、現在でも水田がそれぞれ若干の比高差をみせる。この台地のはば中央から西端近くまでという

広範囲に調査区を設定した結果、西村台地の集落の発達に符合したかなりの年代幅をもつ遺物・遺構がみられた。

調査区の東端であり、西村台地の最高所より北方向の第1・2調査区は調査前、北条池へ向って下る階段状水田の地形を示し、旧来谷筋であったと思われたが、調査の進展とともに、水田面から2~4mの深さをもつ谷地形があらわされた。この谷は前年度調査地点より北条池に注ぐものと思われるが、この谷の5箇所から一括遺物が検出された。活動時期の異なる2基の窯跡に伴う灰原よりの須恵器・瓦等、この谷に人為的に掘削された2箇所の溝より出土した瓦質土器(鉢・塊)土師質土器(壺・小皿)

三巴文軒平瓦、そしてカメを中心とした須恵器等、いずれも貴重な資料である。このうち、2箇所の灰原は谷筋の東岸から谷へ廃棄された須恵器、瓦等によってつくられたものであり、3m幅の谷を遮断する形で広がっていた。灰原の状況からすると谷筋東岸から東へ登る斜面を利用して築かれた窯と思われるが、窯体そのものは水田化のための削平により検出されなかった。この10m離れている2箇所の灰原の土層序からすると谷筋の下流にある灰原が古く、平安時代後半期に相当すると思われる。(第2図)

調査区を西へ進むと、第7・8調査区に池・塚・建物跡がみられた。建物跡は柱穴の径30cm深さ30~40cmの円形ピットをもち、2×1間の2棟である。往間は3×2.8m、3×2mを示す。建物跡から1m北へ寄ったところに深さ80cmほどの大溝が掘りこまれ、西の谷筋へ向っている。ピットからは確たる遺物はみられなかつたが、池・塚などからみられた陶器(備前・



第2図 2号灰原遺物出土状況

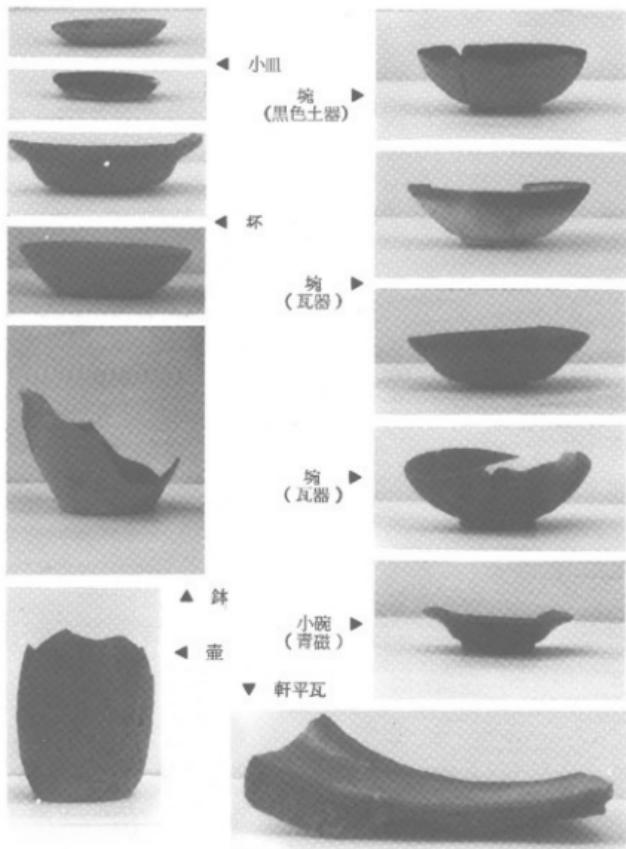


第3図 建物跡と溝(第8調査区)

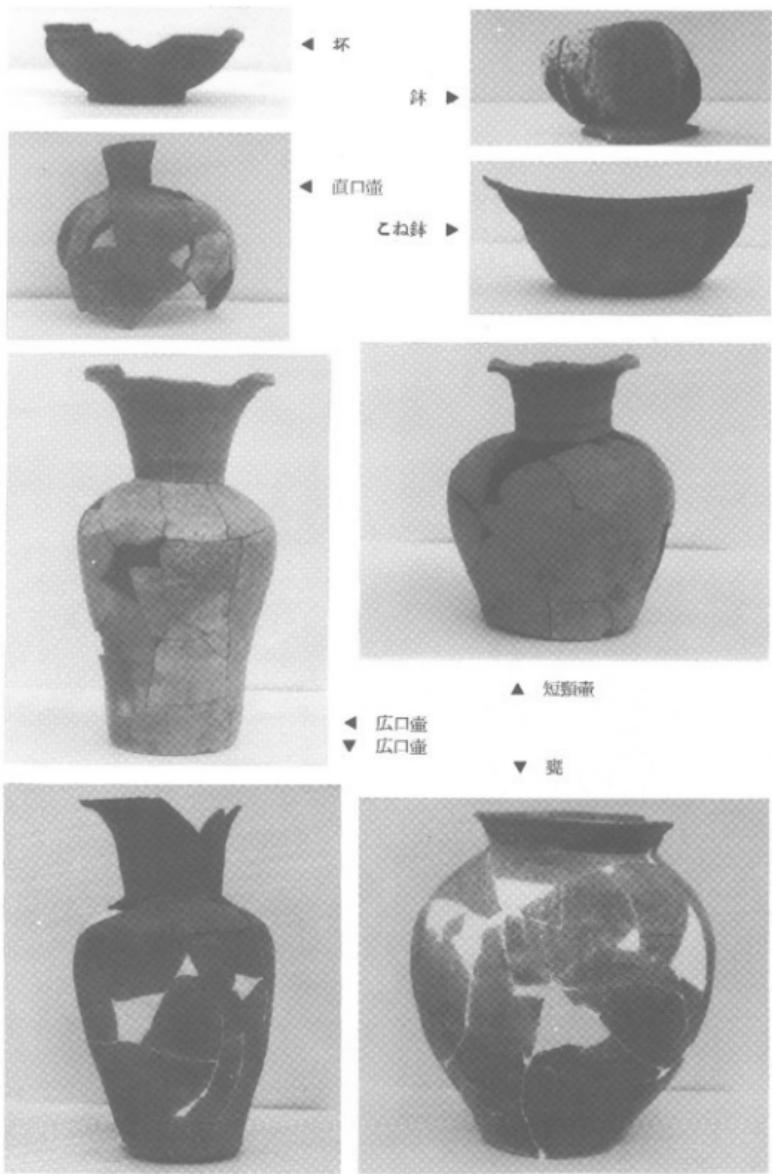
瀬戸・美濃系、信楽)、磁器などから中世後半の時期に相当すると思われる。(第3図)

3 おわりに

今回の調査においてはかなりの年代幅をもつ夥しい多様な遺物と、そして多様な遺構が確認された。ことに時期差の明瞭な2基の窯跡に伴う灰原から出土した各種の須恵器、瓦は不明な点が多く、瀬戸国古代窯業について今後の様々な角度からの研究に貴重な資料となるだろう。そして、「生活の場」と「生産の場」が結合した今回の調査の成果は、陶地区西村台地の集落の変遷とともに、窯業生産の実態とその変質を明らかにすることができます。



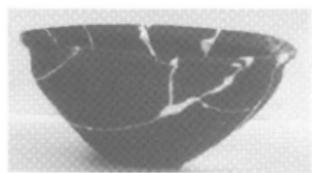
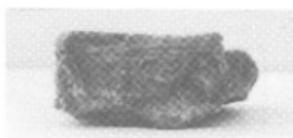
第4図 各調査区の出土遺物



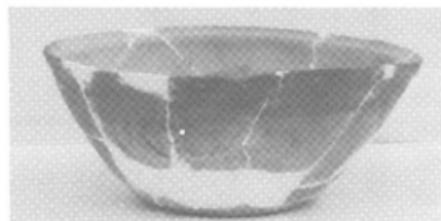
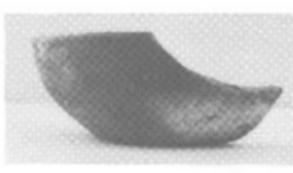
第5図 1号窯跡出土遺物



◀ 軒平瓦 ▶



◀ こね鉢 ▶



▲ 広口壺



◀ 大壺
▼ 壺



第6図 2号窯跡出土遺物

横立山経塚古墳

所在地 高松市生島町 428-62

調査期間 昭和54年12月17日～同55年1月22日

調査担当 寒川知治・伊沢肇一

(1) 調査の経過

本墳は高松市下笠居地区に現存する最古にして最大の、また前方部盛土、後円部積石の特異な構築の古墳として知られる。しかし現状のまま放置すると、開墾によって一部取り壊されている墳丘がさらに崩れたり、盗掘により開口している石室が漸次崩壊する恐れがでてきた。

そのため香川県教育委員会は、従前より行っていた重要遺跡確認調査の一環として、昭和54年12月17日より4日間、墳丘及び周辺の雑木、雑草を伐開し、昭和55年1月8日より7日間を費やして測量調査を実施した。調査面積は約2,000 m²である。

(2) 遺跡の概要

五色台山系の1つ青峰から、北方に長く突き出た尾根筋を通称横立山と呼ぶ。本墳は横立山東側山腹の短い尾根先端部、標高125 m

の地点に位置する。この地は下笠居全域は勿論のこと、多島美を誇る瀬戸内海をも一望のもとに見渡すことができる景勝の地である。

ただ五色台北方の地域は、海岸線が迫るためか古代の遺跡分布が希薄である。しかも、現存する積石塚の原経塚古墳や盛土円墳の桑崎古墳、住吉神社西古墳は開墾により変形を受けたり、内部主体が露出したりしている。

その外には、昭和44年に自然崩壊して今は痕跡をとどめないが、横穴式石室を構築していた巨石が下笠居小学校北東隅の校庭に使用されている彈正原古墳をはじめ、いくつかの古墳の存在が伝えられるのみである。



1. 横立山経塚古墳 2. 弹正原古墳
3. 原経塚古墳 4. 桑崎古墳
5. 住吉神社西古墳

第1図 周辺の遺跡

(3) 遺構について

〔墳丘〕

柑橘類を主とした果樹園で囲まれている墳丘は、開墾のため南東部が削取され、南北87m、東西34m、中央部が膨らんだ異様な形状をしている。

従来、本墳は全長80m、南に前方部、北に後円部が位置する前方後円墳と言われてきた。その是非はともかく、残存部を概観してみると、南端に南北8m、東西6m、高さ1.5m程の石積みがある。これは形状や石の間に近世の遺物を含んでいることから明らかに後世積み上げたものである。これより南は果樹園となり、墳丘の痕跡は全く見ることができない。西辺は、南北一直線に低段の石垣が26m程延びており、東側は切岸状に30~60cm落ちる。その断面を見ると、石を多く含みはするが土質であること分かる。

石積みから北は、平坦面が約7m続き、中程に注連柱が2本立っている。子細に観察すると、注連柱の西側が軽く段状に落ち、前方部様になっている。

中央部の円墳は、積石で構築され最高所で標高128mを測る。径20~80cmの扁平な安山岩がここかしこに散らばる直径10m程の上部平坦面には、盜掘による陥没が4箇所あり、内2箇所は石室に達している。また中央やや南西よりには、墳丘の石で築いたと思われる1.5×2mの石組みがあり、上に豊島石製の祠が南面して安置される。

墳丘の南西部は大きく削り取られ、今は長さ15m、高さ1mにわたって整然と石を積みあげた面になっている。北部は比高差にして約3m下った所に、幅2m程の一段を持ち、再び80cm程落ちる。ただ西辺近くでは、段は不明瞭になっている。

東部は、南西部より145m程、嘴状に突き出している。この部分は、後世積み上げられたものである。

さて本墳を、およそN18°Eの墳丘主軸をもつ前方後円墳としてみた時、後円部が異常に大きいことが目を引く。これは、積石部分の下部を地形として、上部を直径22m程の後円部として2段に構築していることによる。前方部は土盛りで、幅6m長さ12m程残存している。県下の積石前方後円墳では、前方部の長さと後円部の直径の比がほぼ1:1の割合となることより、東側部分のみならず南側部分も削平されているようである。開墾地の中で、石積みの南部が最も高いのはその名残であろうか。



第2図 墳丘南端の石積み

(石室)

石室は調査明日の関係で、詳細な調査ができなかったが、参考までに略測値による概要を述べておきたい。

後円部中央に墳丘主軸に直交して東西方向の主軸を持つ竪穴式石室がある。現在、東端部と中程の北側部分が開口しており、幸うじて内部に入ることができる。

石室の内法は、長さ505cm、幅は東側小口で80cm、中央部85cm、西側小口で100cmを測る。天井石までの高さは、東側小口より西へ40cmの所で45cm、150～250cmの間が90cm、250～480cmまでが480cm、505cm、までが110cmである。計測値が大幅に違うのは、開口部よりの転石で石室が埋まっているためと、西側小口近くを地山が露出するまで床面をかきのけているためである。

側壁は、長さ30～40cm、厚さ3～5cm前後の扁平な石を小口積みにして築く。天井部は平板状の蓋石9石（内東側第1石は祠の踏み石に使用）にて構成され、上幅は45～65cmで西側程広がり、石室断面は持ち送りによって台形を呈す。

(4) 遺物について

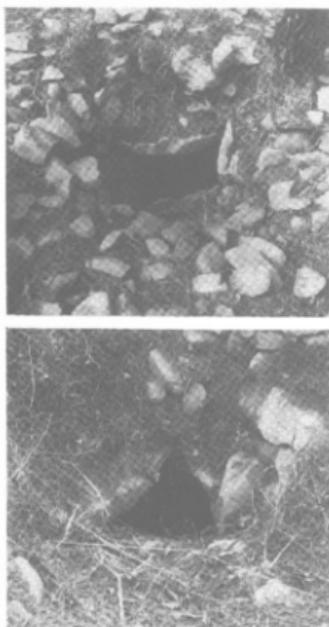
この古墳の石室がいつ頃開口されたのか、又どのような出土遺物があったのかは明らかでない。積石塚の場合、容易にその存在が知れるし、発掘も簡単であるため、石室が開口されたのは相当古い時代に遡るのであろう。

なお今回の調査中には発見できなかったが、近頃まで後円部の各所から円筒埴輪片や器財埴輪片の出土が伝えられる。

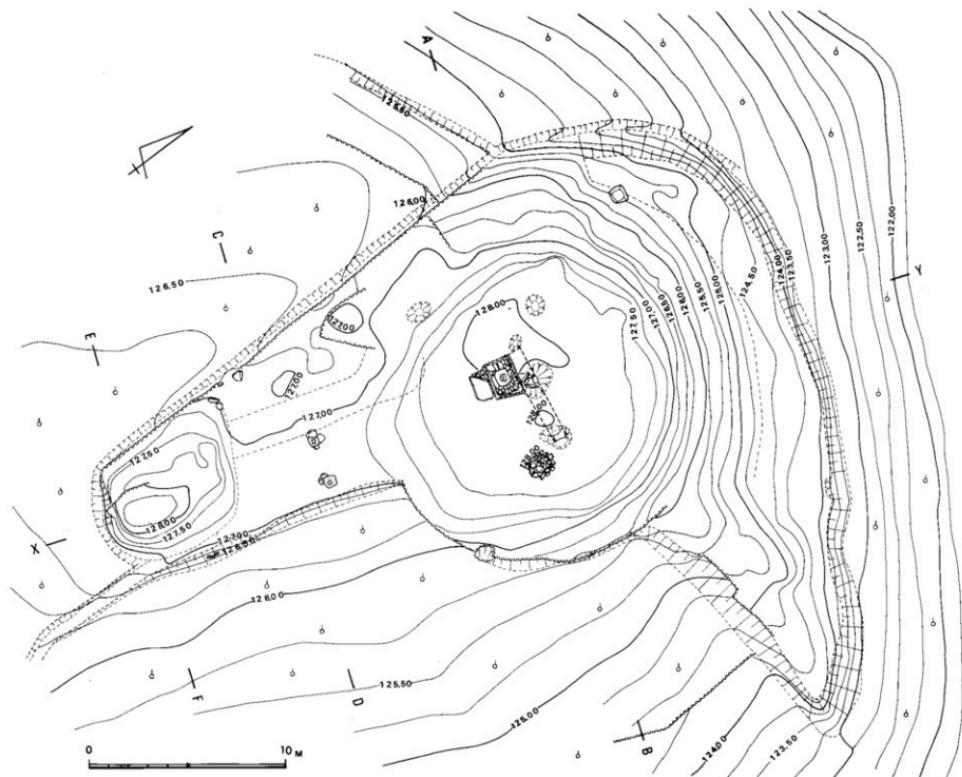
(5) おわりに

本墳の築造年代は、積石前方後円墳であること、前方部が短冊形か末広がりのバチ形を呈すると推定されること、長大な竪穴式石室を有することより、古墳時代前期、4世紀後半頃と考えられる。ただ今回の調査では、墳丘部の発掘や石室の清掃を行わなかったため本来の墳丘の形状や正確な石室の規模など、いくつかの課題が残った。それらの解明は、今後の調査に待ちたい。

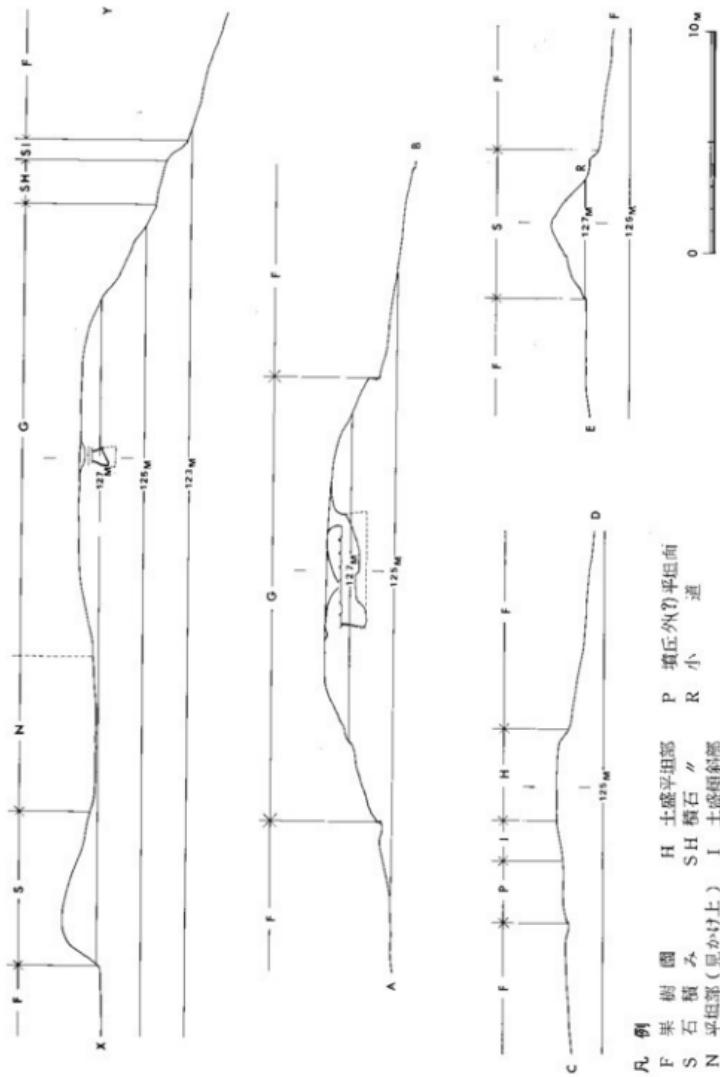
なお本墳の積石後円部は、石清尾山古墳群中の積石塚と違い、土を多量に含んでいることを追記しておきたい。（寒川）



第3図 石室開口部 上図 東端部
下図 中央部



第4図 横立山経塚古墳丘部実測図



第5図 填丘部板・横断面図

(1) 伐開中の墳丘(後円部)



(2) 南より墳丘を望む



(3) 後円部の上部平坦面



勝賀城跡

(第二次調査)

所在地 高松市鬼無町・香西西町・植松町・中山町に跨る勝賀山山頂部

調査期間 勝賀城跡 昭和54年10月29日～同年11月30日

黄峰城跡 昭和54年12月17日～同55年1月7日

調査担当 寒川知治

(1) 調査の経過

中譜の雄・香西氏累代の牙城であった勝賀城跡は、本丸土塁を始めとして造構が殆ど損壊を受けずに残存する。中世譜岐の代表的山城として名高い。

そのため、高松市教育委員会では、本城跡の性格を解明すべく、国庫及び県費補助を得て、昭和53・54年の両年度にわたって本格的な調査を実施した。

昨年度の第一次調査では、城跡の所在する勝賀山山頂部一帯の地形測量（200分の1縮尺）と本丸跡での試掘調査を行なった。また、香西氏ゆかりの佐料城跡、作山城跡、藤尾城跡、芝山城跡の現地踏査も合わせ行ない、その概要を報告した。

本年度の調査は、第一次調査の成果を踏まえ、主として二の丸跡を対象として、発掘調査及び石垣（石垣）等の実測調査を行なった。

(2) 城跡の概要

勝賀城跡は、高松平野の北西部を画する如く聳える勝賀山（標高364m）の山頂部一帯に築かれた中世山城である。

城史は古く、築城者は承久の乱（1221年）で幕府方北条氏に味方し、その戦功により綾・香川四郎の守護職に任せられた香西資村（香西氏初代）と伝えられる。

その後、香西氏は豊臣秀吉の四国攻略によって四世紀近く続いた栄光の歴史が終焉を告げるまで、巧みな策謀により戦乱の世を切り抜けていく。その間、本城跡も度重なる改造工事がな



1. 勝賀城跡
2. 佐料城跡
3. 作山城跡
4. 藤尾城跡
5. 芝山城跡
6. 植松城跡
7. 中山城跡
8. 黄峰城跡

第1図 勝賀城跡と周辺主要城跡

され、中世山城に通有な縄張の中に、畠違、折れひずみ等、本丸跡周辺の里の縄張に特徴的な概観近世的ともいえる巧緻な城構えが組み込まれていく。

現在残る勝賀城跡の縄張について、第1次調査では、従来の説を改め、山頂平坦部として、南に堅固な土塁に囲まれた本丸(第4図1)、北に4郭からなる二の丸(第4図2)、東に2郭からなる三の丸(第4図3)を配し、また堀切によって主要部と切離されている北東尾根上の郭群(第4図456)

は防備の前衛的なもの、北方山復の平坦部(第4図7)は内海への展望に優れていることなどから香西氏の制海権に係る城構えではないかと報告している。

(3) 遺構について

発掘調査は、位置的にも本丸跡に隣接し、在り方も比較的まとまって、建造物跡の存在が最も期待される二の丸跡東部で実施した。発掘面積は約200 m²であるが、その外にも二の丸跡全域にわたって、郭や土塁の縁辺部にある石組みを迫って表土層を除去し、構築状況を記録した。以下、主たる調査部分について略述する。

〔空堀部〕

この調査区は、本丸と二の丸東部2郭を遮断し掘切状を呈する箇所で、主として本丸土塁の防御能力を高める機能を持つ。ここでは調査区の形状に合わせ、東西に不整形な4グリッドを設定した。

調査区の西端、即ち空堀部の内奥にあたる箇所では、北側上端部を中心として、掘舉大から人頭大の疊群を検出した。疊群は一部を除きかなり疊な在り方で、しかも空堀底部に余り転落していないことから石垣とも考えられず、その性格は不明である。あえてその用途を考えると、上端部からの崩壊防止を意図したものか。

空堀部東部は、現状では軽く窪む程度なので、本来の形状を知るため発掘したところ、廃城以来4世紀近く経過しているにもかかわらず殆ど埋没していないことが確認された。このことは、土質が粘性を帯び、



第2図 勝賀城跡遠景



第3図 コ字形石組み部分